

サイクリング 覚え帳

河口橋

KAKOUBASHI



中村 正孝



富山地方鉄道では、毎週、土・日に限り、輪行できる。

入善・朝日町方面へ行くとき、越中中村駅まで富山地方鉄道を利用し、ロードバイクと共に乗車した(自転車料金は無料)。

電車には、四つのドアがあり、中二つのドアは開かないので、上図のように手すりに縛って目的地まで同行した。

この方法は、駅員さんのアドバイスです。

目次

はじめに

朝日町---7 頁

- ・境川 ・滝川 ・大谷川 ・古川 ・笹川 ・木流川
- ・寺川

入善町---30 頁

- ・小川 ・入川 ・布合川 ・平曾川

黒部市---49 頁

- ・黒部川 ・荒俣川 ・吉田川 ・背戸川 ・高橋川
- ・出戸川 ・黒瀬川

魚津市---79 頁

- ・片貝川 ・鴨川 ・角川 ・清水川 ・清水川(赤川)

滑川市---96 頁

- ・早月川 ・小善川 ・坪川用水(鋤川) ・中川放水路
- ・中川 ・沖田川放水路 ・田中川 ・上市川

富山市---119 頁

- ・下条川 ・白岩川 ・常願寺川 ・諏訪川 ・琵琶川
- ・村川 ・岩瀬運河 ・富岩運河 ・いたち川
- ・神通川 ・古川 ・神明川 ・下須川(四方放水路)
- ・山伏川

射水市---171 頁

- ・中野木材整理場水路 ・東部主幹排水路 ・新堀川
- ・下条川 ・西部幹線排水路 ・内川

高岡市---208 頁

- ・庄川 ・小矢部川 ・加古川 ・渋谷川
- ・太田中村東部川

氷見市---222 頁

- ・泉川 ・仏生寺川 ・湊川 ・上庄川 ・余川川
- ・阿尾川 ・垂姫川 ・宇波川 ・下田川

おわりに

はじめに

河

口とは、「河、海または湖に流れこむ所」（広辞苑）とある。その河口に架かる橋を「河口橋」（かこうばし）と名付けた。簡単に言えば、「最下流に架る橋」のこと―。

かつて、都会育ちの方から「富山県民は、富山の水の有難さを感じていない」と言われた言葉が耳に残り、その後、水道水の源から牛か首用水などに関心を持って、サイクリングを楽しむようになった。

ところが、寄る年波には勝てず、河川中程にある「分水工」巡りも容易でなく、徐々に、平地で交通量が少なく、より安全なルートを選んで走るようになり、いつの間にか、富山湾に注ぐ「河口橋」に足が向くようになった。

なお、「川」と「河」について、広辞苑では、「地表の水が集まって流れる水路」とあり、基本的に両者の使い分けはないようだが、日常、「川を渡る」、「小川が流れる」と言っているのに対し、「河」は、「大河」、「黄河」、「銀河」などとスケールの大きい感じがする。

親から「常願寺川が氾濫すると、富山市内が水没する」と聞かされていた。それは常願寺川の河床が富山市内より高いためであり、今も「立山の大トンビ崩れ」の土石流により運ばれた数百トンもの大岩が、常願寺川左岸の畑の中に散見される。

一方、これらの急流河川は、水力発電の適地であり、全国有数の電源県・工業県として発展し、今もその恩恵を受けている。

また、建設省立山砂防事務所では、常願寺川の治水工事が続けられ、併せて、立山砂防ダムの偉業をユネスコ遺産に登録する運動も進行中であり、「立山・黒部ゆめクラブ」のメンバーの一人として応援している。

本紀行アルバムは、2020年から3年間にわたり、富山湾に注ぐ「一級河川」、「二級河川」、「準用河川」及び「農業用水」に架る橋とその周辺を見聞した記録を「覚え帳」としてまとめたものである。

以下、富山県の東側(朝日町)から西側(氷見市)に向けて記載する。

さかいはし 境川の「境橋」

最初の河口橋は、富山県と新潟県の境界になっている「境川」（二級河川）に架る「境橋」である。

下図は、国道8号線を新潟県から富山県へ向かって走り、「境橋」を渡る手前で、山側に見える「境川第二発電所」（出力5,400Kw）である。

水力発電所は、黒部川や神通川などに見られるように、山中深くに建設されているが、この発電所は、海岸線から非常に近い所に立地している。

目測だが、海岸線から約200mの所にあり、日本の水力発電所の中で海岸線から最も近いグループに入るだろう。



境川第二発電所

なお、福井県にある蒲生^{がもう}発電所（1,600Kw）は、海岸線の崖ぶちに立地しており、発電後の水は直接、日本海に放流しているのが特徴である。

「あいの風とやま鉄道」（旧 JR 北陸本線）の鉄橋は、海岸線と並行して走っているが、河床との空間が非常に狭い（下図）。



「境橋」左岸から下流(富山湾)方面

富山県と新潟県を繋ぐ道路は、「国道8号線」と「北陸高速道」の2本しかない。

これは、全国的にみて、まことに稀有な両県である。

新潟県にある「親知らず 子知らず」は、日本一の交通の難所である。

そのため、両県間の人的・物的交流の妨げとなって来た。

今、「境橋」の欄干に立ち止まっていると、車の交通量が少なく(高速道の影響)、また歩行者も見えず、越境の感を一層強くし、併せて、越後の国は、距離以上に遠方にある、と変に再認識させられた。

10年前、東京～富山まで走った時、親知らずトンネル内での恐怖(壁にへばりついてトラックの通過を待つ)を思い出した。



「境橋」の標識(国道8号線)



欄干の「さかいはし」



「境橋」の上流

「境橋」から河口を眺めた時、川の流れが異常と気づいた。

それは、河口から富山湾に注ぐ直前で、流れが突然、直角に左折(西向き)となり、そこから約150m海岸線と平行して流れた後、やっと、テトラポットで河口を護っているような姿で富山湾に注いでいる(次ページの写真)。

これは、東から西に向かってやって来る「寄り回り波」または冬季の季節風の荒波により、河口部が砂礫で塞がれてしまうのを防止するため、河口部をテトラポットで護っているのであろう。

下図は、境川の流れが「あいの風とやま鉄道」を通過した後、直接、富山湾に流れず、左へ直角に曲がり、「テトラポット」に保護されながら富山湾に注いでいる。



境川の河口部の流れ

「富山湾岸サイクリングコース」

「富山湾岸サイクリングコース」は、富山県が「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟し、富山の森・里・山の魅力を楽しむことができるコースとして整備された。

立て看板によると、「富山湾岸サイクリングコース」に点在する「道の駅」、
「魚の駅」、「ヒスイテラス」などの観光施設について、営業時間、定休日、サービス内容など、細かく記載されている。



「富山湾岸サイクリングコース」の立て看板

今回の「河口橋」巡りでは、この「富山湾岸サイクリングコース」を十二分に利用させてもらった結果、本篇は、コースのPR紙のようになった。

その起点(スタート地点)は、境川河口の左岸に設置されており、氷見まで102Kmとある。

なお、2021年5月、国土交通省は、富山湾や立山連峰の雄大な景観を楽しめる

「富山湾岸サイクリングコース」を評価して「ナショナルサイクルルート」(全国で6ルート)に選定し、今後は、ルート整備のための財政的支援を受けることが出来るようになった、との記事を読んだ。(2021年8月5日、北日本新聞)。



「富山湾岸サイクリングコース」の案内板とスタートの標識

「境一里塚」

立て看板によると、一里塚は、慶長14年(1609)、二代将軍秀忠が江戸の日本橋を起点にし、五畿七道に道路の里程を知らせる交通施設として一里ごとに構築させたものである。

この一里塚は、加賀藩領内における第一号のもので、県内において、当時のままの姿で残されているのは、ここだけであり、文化財として貴重な遺構である。

なお、面積は五間四方(約82㎡)とされ、必ず「えのき」を植えた、と記してある。



一里塚の全貌



立て看板



一里塚の中央の小高い所にある石仏



[左図]
富山県朝日町の
林酒造場。

代表の林洋一さんは2021年11月2日の新聞によると、秋の黄綬褒章を受章。1626年創業の老舗酒造で7種類の純米吟醸を販売中――。

「黒部峡」が有名な銘柄であるが、私は、「水のささやき」を時々愛飲している。

「境神社」に上る予定であったが、この階段を見ただけで――？

すぐ隣にある「境関跡」へ向かった。



「境神社」の入口

「境関跡」(さかいせきあと)

通行人を改め取り締まる関所は、その街道を跨ぐように、幅広の「大門」が建立されていた。



「境関跡」の全景

関所全体は、塀や垣で囲まれており、国と国との境界を越えて街道を行き来しようとする人は、必然、この狭門を通らなければならなかった、と立て看板に記してある。



「長谷川地蔵」



「境関跡」の石碑

上図(左)は、関所の敷地内にある「長谷川地蔵」で、その右にある説明石碑によると、境関所二代目奉行の長谷川宗兵衛は、職務遂行のため、前田利常公の了解の下、娘を市振(越後=新潟県)へ嫁がせたが、四代の若き藩主光高公には容認されず、親子3名に切腹を命じた。

可哀そうに思った村民が地蔵を造り供養した、と記してある。

関所と言えば、時代劇に登場するシーンが印象深いですが、実は「入鉄砲に出女」の取り締まりである。

女性の取り締まりが強いのは、江戸に居る大名の妻子の逃亡を防ぐ事、人口減少による農業生産力の低下の防止であった、と習った。

「護国寺」

護国寺は、シャクナゲで有名な真言宗のお寺である。
809年に弘法大師によって創設された、と記してある。

写真(下図)の後ろの山手には、回廊式庭園が整備されており、4月はシャクナゲ、5月はツツジ、6月はサツキが楽しめる。

過去に来たことがあり、また、今回は10月だったので、サイクリング中の交通安全のお守りを求めて先へ急いだ。



護国寺の正面

滝川の橋

滝川は、護国寺の横を流れている。

護国寺の背(後)は、山であり、その谷筋から流れて来た小川であろう。

護国寺の目の前、約 200m 先が富山湾である。小川でありながら、その勾配がきついため、流れが速く、その水音の力強さが印象に残った。

富山湾岸サイクリングコースに架る橋には、名前は無かった。



左図は、護国寺の駐車場の横を流れている滝川



右図は、護国寺の駐車場から約 200m 先の富山湾を見る。

「滝川」から黒部寄りの「大谷川」までの約 2km の間に、4 本の小川が「富山湾岸サイクリングコース」を横断しているが、いずれも川幅が 2m 前後であり、川の名前と橋の名前は、記されていなかった。

いずれも、山の谷筋から流れて出た小川であろう。

右図もヒスイ海岸沿いの「富山湾岸サイクリングコース」である。

四輪車の「わだち」が見えるので、コンクリート舗装の一般道路と思って走っていたが、防波堤の上部であった。



防波堤上の「富山湾岸サイクリングコース」



小川

左図の小川(山の谷筋から流れ出る水)が何本も集まって、下図のような構造で富山湾に注いでいる。

この種の構造物は、一般的である。

「富山湾岸サイクリングコース」の路面は、海面から約10 mの高さがあるかと思われる。



小川が数本集まって富山湾に注ぐ「河口」(海面から高い堤防)

大谷川の橋

「富山湾岸サイクリングコース」を横断する河川には、「大谷川」のように時々、河川名は記されているが、橋の名前、橋の竣工年などの記載はなかった。大谷川は、準河川のようなだ。



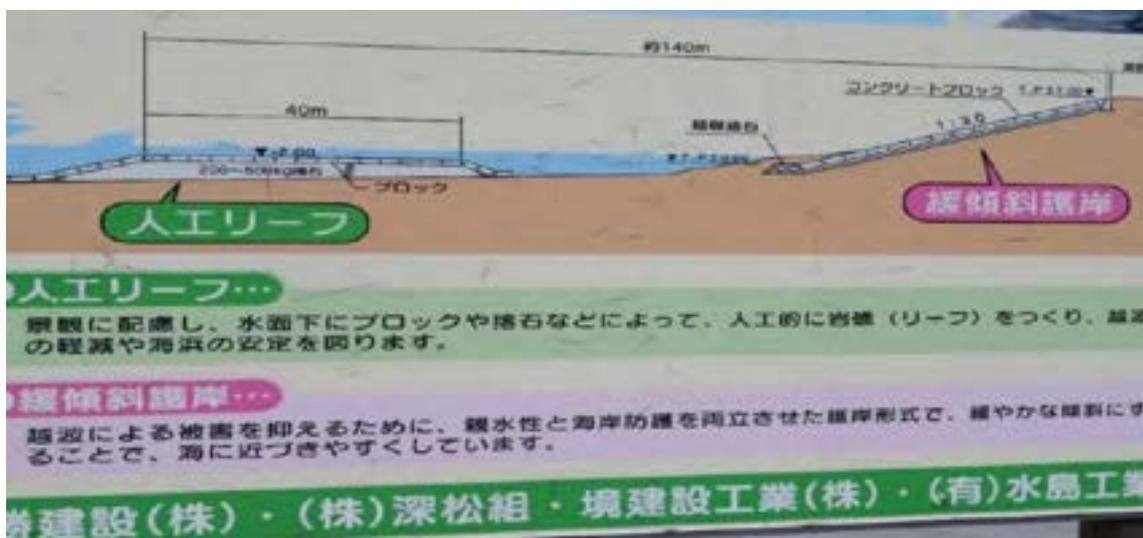
大谷川の上流



大谷川の河口

「境海岸浸食対策事業」

「境川海岸」の道路には、下図の浸食対策の説明看板が複数か所ある。



「境海岸」防波堤の案内板

案内板によると、

^{さかいかいがん}
「境海岸」は、富山県の東側に位置する長さ 2.3km の海岸線を言い、富山県特有の「寄り回り波」と冬季に押し寄せる大きなエネルギーを持った波により、浸食される全国的に有数の浸食海岸である。

^{かんけいしゃごがん}
ここの護岸の形は、「緩傾斜護岸」方式という。

上図のとおり、海岸線から、1:3 の勾配でコンクリートブロックが敷設されていて、親水性と護岸性を保持している。

又、海岸線から沖合 50～100m の所に、人工的な浅瀬の岩礁のコンクリートブロック(水面下 2m)を構築し、波の軽減と海浜の安定性並びに景観を保持している。これを「人工リーフ」という。

「寄り回り波」とは、主に冬季において、北海道の西海上で北よりの暴風が吹き、この風で高波(風浪)が発生し、それがうねりとして南へ伝わり、富山湾に到達する波の事である。

うねりが伝わるのに半日から 1 日かかるので、風が収まった頃に突然高波が来るため、不意に打ち寄せる、と記してある。



左図: 「緩傾斜護岸」、 右図:護岸に沿った「富山湾岸サイクリングコース」

下図のような「小川」に橋が架かり、欄干もあるが、川の名前、橋の名前などは記してなかった。



小川



暗渠構造になった流水口



「ヒスイ海岸」

「ヒスイ海岸」を走っていると、上図の釣り人が手もち無沙汰の様子だったので、「釣れますかー」と声を掛けると、「あぶら待っている」と言う。また、話の途中で「わく」とも言う。

良く理解できないので、聞き直すと、フクラギが小魚を追って海岸線近くに来ると小魚は丸くまとまり、海面が「水しぶき」となる現象を表現している、と言う事が分かった。

その釣り人は、話の途中、突然、一目散に海岸線へ走り出し、そこに置いてあった釣り竿を取って、カー杯(約5~60m以上)投げたかと思うと、入れ食いのようにフクラギが釣れ出した。その時間は、約1分程度であった。

高知のカツオの一本釣りのような仕草である。

釣り人達は、この1~2分のために、海岸線の堤防から遠くの海面のわずかな変化を今か今かと待っている遊びである、と理解した。

釣り人は、4人いたが、残りの3名は一匹も釣れなかった。

釣り人と一緒に楽しんだひと時であった。

「ヒスイテラス」

「越中宮崎駅」の正面玄関に新しい「ヒスイテラス」が建っていた(下図)。

1階がイベントホール、レンタサイクル、調理室、シャワールーム。

2階がギャラリー、オープンコリドー、くつろぎのテラス。



「ヒスイテラス」の建物(正面)

屋上の「天空テラス」は、次頁のとおり、視界を遮るものが無く、富山湾の大自然を心行くまで満喫できる。



「ヒスイテラス」の屋上から眺める富山湾

先日の新聞ニュースでは、青森市の「三内丸山遺跡」の「ヒスイ」を鑑定した結果、この宮崎産であると報じられていた。

縄文時代にあって、装身具として、どうしてそんな遠くまで届けられたものかと、感心するばかりである。

なお、2016年、日本を代表する石として、初めて「国石」に選定された。



「ヒスイテラス」の屋上から見る越中宮崎駅

古川の「古川橋」

古川は、宮崎鉦泉別館の横を流れている。
境川から川幅が 2m 位の小川ばかり見て来たため、「古川」は大きく見えた。
昭和 28 年 2 月 25 日竣工とある。



「古川橋」の下流



欄干に記した河川の名前「古川」

みや さきはし

宮崎漁港の「宮の崎橋」

「橋」と言えば、川または湖を跨ぐ道(構造物)であるが、なんと、この「宮の崎橋」は、宮崎漁港を跨いでいる橋である。

次頁の左側の道路そのものが「宮の崎橋」であり、その橋の下部が漁船の係留エリアと荷揚げの作業場となっている。

他に例を見ない特筆される「橋」である。

橋(道路)の左側に人家が連たんしており、右側は宮崎魚港である。

「宮の崎橋」の説明看板によると、

宮崎魚港は、山を背にしているため、サカナの荷揚げ作業スペースが狭く、運搬にも不自由な港であった。

そこで漁港内の作業の煩雑緩和と土地の有効利用を図るため、昭和 63 年から整備され、平成 5 年に完成した。

その特徴は、二階建て構造である。

その二階部分が「宮崎漁港臨海道路」(400m)と称し、道路幅 12m の幹線道路となっている、と記してある。



道路そのままが「宮の崎橋」、右側に「宮崎漁港」

下図は、「宮の崎橋」の対岸の防波堤から宮崎漁港を写す。

「宮の崎橋」の下部の倉庫みたいところに、漁船が入り、その手前が荷揚げの作業スペースとなっている。



「宮の崎橋」 背後の小高い山が「宮崎鹿島樹叢」(国天然)

下図は、「宮の崎橋」の断面図である。
 説明看板には、
 漁港と背後の集落地との高低差を利用し、二階建て構造としたPC片持ち張り出し構造とした。
 その結果、岸壁に屋根がかかる構造となり、冬季の強風・降雪時の作業性を大きく向上した、と記してある。
 宮崎港は、「寄り回り波」を避けるため、港の西側に漁船が入出できる、狭い開口部がある箱形の漁港となっている。



「宮の崎橋」の断面図



「みやのさきはし」の欄干



宮崎港の燈台



「元屋敷カメラ中継塔」



朝日町横尾にある脇子八幡宮の旧跡



左上下の写真は、元屋敷海岸にある、「海岸カメラ中継塔」である。

このような施設は、富山県の東部海岸沿いに散見され、最も東側が「境カメラ中継」、最も西側が「石田カメラ中継」であり、富山湾内に 22 か所の常時監視所がある。

石田浜海岸より東側にしか設置されていない理由は——？。



朝日町の宮崎海岸と鹿島樹叢(じゅそう)——県道 60 号線から

宮崎漁港から西に向かって海岸線を走ると、上図の海岸線(傾斜型の防波堤)とテトラポットが重なっている。標準的な海岸線の風景と言える。



写真(左)は、谷筋から流れて来た小川で名前は付いていない。
写真(右)は、海岸線と平行して走っている「あいの風鉄道」。

笹川の「笹川橋」

県境の「境川」を出発してから、「富山湾岸サイクリングコース」を入善町の方
向へ走って、初めて「川らしい川」に直面したのが「笹川」(二級河川)であ
る。

富山県河川課で教えてもらった。

- ・「一級河川」は、上流から多くの支流を吸収し、徐々に大河となって富山湾に
流れ、国土交通省が管理している。
- ・「二級河川」は、一級河川以外で、公共の利害において重要であって、富山県
が指定した河川の事。
- ・一級、二級河川以外に、市町村長が指定した「準用河川」がある。
- ・更に、我々の周りには、多くの「農業用水路」があり、その管理は、その組合
が維持管理することになっているとの事。それは農林水産省の管轄になる、と
いう。

「笹川橋」は、右図のように
幅広い歩道があり、サイクニス
トにとって安全であり、有難い
歩道である。

欄干には、川の名前「笹川」
橋の名前「笹川橋」と「ささが
わはし」そして竣工年月「昭和
60年10月」としっかり記して
ある。



笹川橋の左岸から富山湾。



笹川橋の上流。欄干に「笹川橋」。「あいの風とやま鉄道の橋梁」



左図
 笹川の右岸から富山湾を見る。
 欄干に「ささかわはし」とある。

「笹川」の河口(下図)

富山湾に注ぐ「笹川」の清流に心が洗われた――。

標高 1042m の黒菱山(くろひしやま)を水源とし、流路延長わずか 6km の川である。



10月下旬であっても、流れは絶えることなく、河口に辿り着いた清い流れを無心に見ていると、自然の営みの中に自分が生かされている、という気持ちになる。鴨長明には及ばないが——そんな雰囲気。



「笹川橋」の上流 赤い橋桁は「あいの風鉄道」



欄干に竣工年月

潮害防備保安林



立て看板によると、潮害の防備を目的とした保安林は、富山県が朝日町横尾地内に「海岸防災林造営事業」として、平成24年度に施工された、と記してある。人工的に植林されている。





左図は、「笹川」と「木流川」(きながしかわ)の中間地点に流れている小川だが、写真とおり石垣の護岸は美しい。

きながしかわ ありそはし
木流川の「有磯橋」

木流川は、下新川郡朝日町の中心部(泊町)を流れる二級河川であり、その河口橋は「有磯橋」である。



「有磯橋」の河口(富山湾)



「有磯橋」の上流



欄干:「ありそはし」



竣工:「平成9年10月」

大屋海岸浸食対策事業

立て看板によると、
「寄り回り波」と「冬季の風波」対策として、昔は、直立型(壁型)の防波堤を築いてきたが、それを改め、快適な海浜が利用でき、景観的にも優れた、波浪低減の「人口リリーフ」と海浜の安定に効果的な「緩傾斜護岸」による整備を進めている、と記してある。



対策の説明案内板

下図は、「木流川」と「寺川」の間に流れている二つの用水だが、いずれも「富山湾岸サイクリングコース」を横断し、富山湾に流れている。



農業用の排水路と思われる小川が多数散見される
(上下図)



てらかわ ひがしくさのはし
寺川の「東草野橋」

寺川は、小川頭首工を水源とする二級河川である。



田畑を潤して富山湾に流れている。

左図は、寺川の河口であり、写真のとおり、テトラポットに守られ、奇麗に整備されている。

「寺川」から「小川」に向かって「富山湾岸サイクリングコース」を走る予定であつたが、

護岸改修工事により通行止めとなっていたため、上流の県道 60 号線(入善朝日線)へ出た。

そこには、写真(下図)のとおり、平成 16 年 7 月竣工の新しい「東草野橋」が架かっており、そこら一帯は、生涯学習館のほかにも新興住宅が並んでおり、旧市街地から郊外へ発展している様相であった。



欄干に「寺川」



欄干に「東草野橋」

寺川の左岸に建つ
「生涯学習館」



下図は、県道 60 号線沿いにある、浄土真宗 本願寺派 照圓寺



おがわ あかがわはし
小川の「赤川橋」

小川は、その源を立山連峰の北側とし、現在、朝日小川ダムの建設により、水力発電とかんがい用水に利用されている二級河川である。

支流の「舟川」は、桜の名所として、最近、有名になって来た。

特に、桜の満開時期、チューリップと菜の花と北アルプス冠雪との調和は、「見ずして語るべからず」というところであり、多くのカメラマンが四重奏のシャッターチャンスを狙っている。

この「小川」の河口橋は、「赤川橋」で、富山県道 60 号線の旧北陸街道に架っている。

「赤川橋」は、河口から約 800m 上流に架っているのので、下流の住民は、小川を横断するのに不便だろうと思ったが、小川の左岸側は、広い田園地帯であり、橋の必要性は無かったのであろう。



「赤川橋」の欄干にある「小川」と赤川橋



左図
欄干に「あかがわはし」
「平成27年3月竣工」

右図は、
「小川」の河口
風景である。

富山湾に注ぐ
河口の右側に、
何故か、うず高
く川石が盛られ
ていたが、これ
は、明らかに、
人工的である。



河口に堆積した川石が小川の流れをせき止めてしまうために、ブルドーザーで河口の石を取って、横に積み上げたものと思われる。

それにしても、石ころのサイズは、大きい。

富山県呉西の「庄川」、「小矢部川」とは全く異質の風景である。

入川の橋

「富山湾岸サイクリングコース」に架る橋には、どこも名前がついていないが、ここには、「入川」と記してある。

「入川」は、写真(次頁)の通り、農業用水として、きれいに整備されている。

当日の流量に対して、入川の川幅、そして護岸の高さ(深さ)は、中規模河川級であり、とても農業用水とは思えない。おおよそ、降雨時には、湧水も加わって相当の水量になるのだろうと思われる。



「入川」の河口部(左)と上流部(右)



「富山湾岸サイクリングコース」と並行している「防風林」



左図:「西ノ宮神社」

「富山湾岸サイクリングコース」に面した、この「西ノ宮」神社は、小さい社だが、奇麗に掃除されている。

この村の人たちの心遣いに思いする。

「小川」から入善「牡蠣の里」に向かって走ると、左に「防風林」、右に「富山湾」、その真ん中に「浄化センター風力発電」が見えて来る。



「浄化センター内の風力発電」

立て看板によると、この風車は、風速 3.0 メートル/秒から発電し、風速 14.5 メートル/秒以上になると、プロペラの角度を変えて破損を防止する。

また、風速に応じて、効率よく発電するためにプロペラの角度を調整している。

発電能力は、最大 1,500KW で、一般家庭の約 700 世帯分に相当する、と記してある。

なお、当日は微風のため、停止していた。



風力発電の底部



「入善浄化センター」の横を流れる「青島排水路」

旅館「かしはら」と柏原兵三



「かしはら」旅館の正面



大江健三郎氏揮毫の軸

2021年10月15日、自宅を午前8時に出発し、御福さんのトラックに便乗して朝日町まで行き、その日は、旅館「かしはら」に逗留した。

旅館「かしはら」は、ドイツ文学者で芥川賞作家の「柏原兵三」（かしわはらひょうぞう）の末柄という。

大江健三郎氏が書いた軸が座敷に掛かっていた。

掛け軸に書かれていた言葉は、「柏原兵三さんは、ドイツ文学の専門家であり、ドイツ留学に根ざした作品もあります。——(略)——父祖の家に疎開して、少年時を過ごした入善町の生活をじつにこまかな事実と観察と情感を込めて描かれている。——(略)——そのような柏原さんの文学碑がほかならぬ、父祖の地の学校跡に建つことを柏原さんの文学と人なりを懐かしむわれわれはここから喜びます。」と書いてある。

また、2022年8月24日～12月4日まで、富山市の高志の国文学館で没後50年の記念展示が開催された。

旅館「かしはら」の裏手には「養照寺」と「米澤記念館」がある。

記念館は、土蔵を改築した建物であり、朝、鍵が開けられるのを待って見学した。



「養照寺」（浄土真宗大谷派）



お寺の横に建つ「米澤記念館」

説明によると、

「米澤紋次郎は、安政4年(1857)、入善町の大地主の次男として生まれる。

当時、越中全域は石川県に属していたが、越中住民の声が県政に反映されず、不満が募っていた。

そこで、越中改進黨が結成され、明治15年(1882)、政府に分県を求める請願をすることになり、25歳の紋次郎は、入江直友とともにその総代に選ばれた。

同年9月、岩倉具視、山県有朋らの政府要人に粘り強く陳情を重ね、明治16年(1883)、5月9日、大政官達が発せられ、石川県からの分県が決定し、富山県が誕生した。」と記してある。

「富山県の生みの親」である。

今年、2023年(令和5年)は、置県140年の節目に当たり、新聞報道、テレビ放送の特集があった。



下図は、「あいの風とやま鉄道」の入善駅前である。



「じょうべのま遺跡」

「じょうべのま遺跡」は、写真のとおり、田園の中の樹木という感じであり、観光マップに記載されていなければ、通り過ぎてしまう。



「じょうべのま遺跡」の全景

立て看板によると、

「ここに表示した五棟の建物跡は、平安時代のものである。

同時代に6回も建て替えられた建物群のうち、コの字型配置をとる最も整備された時期を復元したものである。――(略)――

この遺跡からは「寺」、「西庄」などの文字が書かれた土器や「上白米五斗」と書かれた木簡(木の札)などが出土しています。」と記してある。

現在、国指定史跡となり、遺跡公園として整備されている。

右図の案内板は、建物が立体的に書かれており、平安時代の集落と人の動きが楽しく想像できる。



案内板

「田中海象観測所」

「じょうべのま遺跡」の西側に「田中海象観測所」がある(下図)。



立て看板によると、

「田中海象観測所」で計測している項目は、下記のとおり。

1. 波高観測---沖合約 500 メートル地点の海底 14 メートルに沈設
2. 波向観測--- 同上
3. 風向風速観測---コンクリート柱上
4. 海岸監視カメラ---地上約 12 メートルにカメラを設置

(監視範囲: 360 度)

国土交通省 黒部河川事務所 入善海岸出張所

海岸線の狭い空き地に、数十トンもありそうな超大型のテトラポットが製造されている(次頁の写真)。



超大型のテトラポットの製造海岸

入善町の湧水群

「じょうべのま遺跡」から「杉沢の沢すぎ」の約 2.5km の間に、7つの小川があり、それぞれ富山湾に注いでおり、いかに湧水が多いかが分かる。

説明看板によると、

「園家湧水の庭」、「五十里湧水の里」および「杉沢の沢すぎ」が点在しているように、黒部川の水が、地下数十メートルの粘土質（これが遮水層となる）に守られて、地表に湧き出る地下構造によるものだが、これが入善町の大きな特徴である、と記してある。

写真(右図)のような小川が数百メートルの間隔で富山湾に注いでいる。





「富山湾岸サイクリングコース」を横断する農業用水群



小川(農業用水)は、10月だが、水量は豊富である

これらの小川は、横山排水路、青島用水、高登川、上原用水、東狐用水、田茂



川の名前がついているが、サイクリングコースでは、全て暗渠構造で流れているので、個別に確認することは出来なかった。

「富山湾岸サイクリングコース」と山脈(北側)

「富山湾岸サイクリングコース」の防波堤に、下図のようなコンクリート製の壁型構造物が残っており、今となっては珍しく、貴重な存在のように思われた。



その壁面に描かれた顔を見ていると、なんとなく癒される。
(左・下図)



布合川の橋



左図は、布合川が富山湾に流れ出る突堤(とつてい)※である。

この日は、休日のためか、4人の釣り人が楽しんでいた。

今度の「河口橋」踏査では、多種多様の突堤を観てきたが、釣り人と比較して分かる通り、富山火力発電所の横を流れている「古川」と共に最も大きい突堤の部類に入る。

なお、突堤からの放水口は、富山湾へ向かって真っすぐに向いている造りは、稀である。

大部分が西向き(または直角に左向き)の造りとなっている。

(※) 突堤とは、海岸から真っすぐに突き出たコンクリート製の暗渠構造物を言う。

暗渠構造の突堤が海に向かって10m以上も突き出ているのは、寄り回り波や冬季の季節風によって生ずる砂の流れが、川水をせき止めてしまうような塊になるのを抑制するためである、と工事関係者から教えてもらった。



左図は、「富山湾岸サイクリングコース」を横断する布合川の上流。



左図は、富山湾に注ぐ手前2~30mの所だが、サイクリングロードから、暗渠になっており、しかも排砂作業中でも水の

流れを止めなくても良いよう、暗渠部の中央部は、隔壁を設けて二等分されている。

宮崎海岸は、下図のとおり、テトラポットが二重に投入とれているところが多い。



宮崎海岸のテトラポット

そのけやま
「園家山キャンプ場」

園家山キャンプ場は、小高い砂丘の松林に囲まれた中に、バンガローが数棟あり、岩瀬浜黒崎と同じ砂浜のキャンプ場である。

ここで、オーストラリアからの新婚夫婦に会い、暫し歓談させてもらった。

これからの行程を聞いたが、大変おらかな話をされており、何時になったら自国に帰って仕事されるのか心配になった——日本人の性か。



キャンプ場の全景



キャンプ場の「園家砂丘の一等三角点」(左)と「園家湧水の庭」(右)

立て看板によると、

「園家砂丘の一等三角点」は、日本全国を測定し、5万分の1の地図を作製する際に、基点として設けられたもので、全国に973か所（平成16年4月現在）設置されている。

富山県内には、立山など7か所あり、ここがその一つである。

標高17.36メートルで、明治28年7月30日に設置された、と記してある。

海岸側の砂丘としては、非常に高いのは、季節風などによって、海岸線が砂でうず高く盛り上がったためであろう。

当日、ペットボトルを持たないで出発したため、喉がカラカラになっていたところ、この湧水に出会い、砂漠のオアシスのように、バカ飲みした。



「園家湧水」の水飲み場(左右図)

勿論、自然湧水なので、美味しいのは当たり前だが、渴望していた時の恵みは、生ビール以上であった(その時は)。

黒部川の湧水群(高瀬地区)

「富山湾岸サイクリングコース」は、園家山キャンプ場から「魚津生地入善線」(県道2号線)に合流した地点に「黒部川湧水群(高瀬地区)」がある。

当日、5名の人が水汲みに集まっていて、7～8m離れた湧水か所に、次から次とぺっとボトルを入れ替えていた。

国土庁長官(鈴木和美)から、入善町長に「水の郷」認定書が平成8年3月発せられた、とある。

なお、この近距離にある2か所の水質は、異なると言う事で、その人の好みで取水か所を決めている、と聞いた。



国土庁長官の認定書



多数のぺっとボトル

立て看板によると、

黒部川は、北アルプスに源を発し、深いV字峽を刻みながら、我が国を代表する「黒部川扇状地」を創り出した。

黒部川上流の花崗岩と下流の砂礫層が不純物を吸収、ろ過し、溶存ミネラルや炭酸ガスを含み、おいしい水の要件を備えている。

しかも、扇状地の海岸部では、地下に発達した粘土層がみられ、被圧地下水槽を形成し、30mも掘ればポンプ無しのまま、地表に自噴してくる。

こうしたことから、国(環境庁)より、この一帯を「黒部川扇状地の湧水群」として、名水百選に選定された、と記してある。

ひらそのがわ

平曾川の「平曾の橋」

平曾川は、黒部川右岸の田園地帯を潤し、「牡蠣の里」の横を流れて、富山湾に注いでいる二級河川で、写真(次頁)のとおり、奇麗に整備されている。



欄干に「平曾川」



欄干から上流を見る



「ひらそのはし」



「平曾の橋」は、魚津生地入善線(県道2号線)に架る橋である。

欄干には、川の名前、橋の名前、「平曾の橋」、橋の竣工年月(平成14年3月)と表示してある。



平曾橋から下流(富山湾方面)

「牡蠣の里」と「浜マルシェ」

魚津生地入善線(県道2号線)を朝日町から黒部川に向かって走り「牡蠣の里」に到着したのが13時過ぎだった。

大型観光バスのお客さんの他、空席待ちのお客さんが5~6名、並んでいる、という繁盛ぶりのため、諦めて、隣の「海洋深層水パーク「にゅうぜん浜マルシェ」を見学した。



「牡蠣の里」は、富山湾の深層水による養殖カキだけとっていたが、左図のとおり、広島、兵庫、北海道など、各産地のカキと食べ比べ出来るという。

「浜マルシェ」は、「牡蠣の里」隣の建物で、深層水の取水から、利活用などに関する説明コーナーとおみやげ店である。

取水は、深水384m、1時間で100 m³（1分間で1升瓶1.7本）、（正面取水管延長=3,308m）、とある。

取水と言っても、ポンプでくみ上げているのではなく、「サイフォン方式」の原理によって海面下に流れ落ちる、という構造になっている。

また、深層水の水温が低く、そのまま養殖には利用できないことから、隣の「無菌パックご飯工場」から排出される熱エネルギーとの交換によって、深層水を加温して、事業が成功した、と友達の君島さんから聞いた。

なお、深層水の使われ方は、

- ・無菌パックご飯工場において、工場の熱から深層水を加熱し、カキ、アワビの蓄養。
- ・魚介類の安定出荷
カキ、アワビ、ヒラメ、マアジ、タイ類、マダラ、カニ類など。
- ・漁船への供給水。

「浜マルシェ」は、深層水を活用したお土産店であり、記念に深層水を使用したアイスクリームを食べてみた。

少し塩味があるのではないかと思ったが、意に反して、甘味のみであった。

「入善漁港」

下図は、入善漁港の東側にある小高い丘「はまなす公園」から写した入善漁港の全景である。入善漁港の形状は、宮崎漁港と同じ長方形である。



入善漁港の全景

それは、漁港全体がコンクリート製の護岸で囲まれていて、その西側に漁船の出入りする小さな開口部が付いている、というスタイルである。



入善町案内マップ
(立て看板)

「浜マルシェ」から「入善漁港」へ向かって走ると、芦崎という地域に入る。諏訪社、飯野郵便局、美容室、電気屋さん、畳屋さん、魚屋さんなど、日常生活に必要な店と人家が密集しており、一つの町内が出現した。



「はまなす公園」全景



諏訪社

生地駅前

あいの風とやま鉄道の「生地駅」前のロータリーの中に、下図「コートの子」の彫刻があり、その横に飲料できる湧き水がある。

湧き水は、どこでも美味しい。



「コートの少女」



「生地駅」正面

黒部川の「しもくろべはし下黒部橋」

黒部川は、上流に日本最大の落差を有する黒部溪谷、その下流にある愛本から扇の要となる扇状地を形成し、富山県七大河川(※)の一つ、一級河川である。

その河口橋は、「下黒部橋」である。

黒部川の河口から約 1km 上流に「下黒部橋」が架かる。

「下黒部橋」の中程から、下流の富山湾を眺めた景色は、驚異の絶景であった(下図)。

(※) 黒部川、片貝川、早月川、常願寺川、神通川、庄川、小矢部川



「下黒部橋」欄干から河口を望む

「下黒部橋」の中程から河口を望む景色(上図)は、単に、大パノラマ、雄大というだけでなく、自然のパワーを感じさせ、ISS(国際宇宙ステーション)の貴賓席から地球を眺めている気持ちにさせてくれた。

また、足下の中洲の浅瀬に立つ「しらさぎ」は、飛んだかと思うと、休む、の繰り返しに、まったく屈託がなく、いつの間にか、その営みの中に引き込まれていた。

そして、何故、そんなに水面すれすれに飛ぶのか、と疑問を持ったところで、車の振動と騒音に気づき、現実に戻った。

それは、欄干に立つ自分自身が広大な空間の中に置かれて、時間を忘れさせ、宇宙空間と自分を繋ぐ不思議な感覚にさせられた、ひと時であった。

また、後ろを振り返ると立山連峰の峰々が聳え、黒部川の雄大さを引き立てていた。

サイクニストの皆さんへ

黒部川の扇状地に関しては、富山大学のほか、友人の君島さんも調査研究の成果を発表されている。

湧き水と言えば、当初、有名な生地地区に限定されているものと思っていたが、入善町～黒部市～魚津市～滑川市～富山市の多くのところで発見する事ができた。



黒部川の左岸からの入善方面

万葉集には、「射水川」(※) や「早月川」の名前が詠まれているが、「黒部川」を詠んだ和歌が見当たらない。

それは何故か――？

自分なりに推察していたのは、黒部川の流れが、愛本の堰堤から放射状に数多く分流(黒部四十八ヵ瀬)していたため、早月川のように、まとまり、固定した河川ではなかったのではないかと想像していたが、入善町の君島さんから、詳細な説明を頂いた。

要約すると、その当時の大伴家持の仕事は、「巡検」であり、田畑の無い黒部川扇状地へ出向く必要が無かったため、黒部川まで行脚していない、という回答であった。



黒部川の上流の立山連峰

(※) 奈良時代の庄川は、小矢部川に合流しており、合流地点から下流の富山湾までを「射水川」と称していた。



「下黒部橋」と上流の「あいの風鉄橋」



黒部川の左岸から入善
方面を見る。
「下黒部橋」とある



欄干の表示は「しもくろべはし」



「昭和 41 年 9 月 30 日 竣工」



左図は、
黒部川の右岸にある「黒部川内水面農業協
同組合」。さけ、マスの養殖実施中。



左図は、「黒部川」の左岸に並行して流れている農業用水。

右図は、その農業用水が富山湾に注ぐ小さな河口である。

写真のように、サイクリングロードから海岸線まで約 4~5m しかない。

河口の両サイドは、テトラポットで簡単に保護されている、可愛らしい河口である。

すくって飲みたくなるような、きれいな水が流れていた。



湧水の河口

黒部川から黒部漁港までの海岸線は、浸食が激しく、テトラポットまたは後述の新工法で、その浸食防止対策が施されている。



ここでも、それほど古くないテトラポットが二重に敷設されていて、テトラポットとテトラポットの間は、写真のような砂浜が生まれていることから、テトラポットの効果が見取れる。

テトラポットが二重になっている海岸線

荒俣川の橋

荒俣川は、黒部市荒俣地区を潤している農業用水である。

右図は、その最下流に架っている橋である。

荒俣海岸と並行して走るサイクリングロードには、橋の名前は見当たらなかった。



荒俣川の河口橋



荒俣川の上流



荒俣川の河口



左図の道路は、黒部川の「下黒部橋」から YKK(株) 黒部事業所 YKK AP 黒部越湖製造所まで、舗装された海岸沿いのサイクリングロードである。

左に防風林、右に富山湾、快適で眺め良いサイクリング道である。

よしだばし 吉田川の「吉田橋」

吉田川は、黒部市内の田畑を潤し、YKK(株)黒部事業所 YKK AP 黒部越湖製造所の横を通って、富山湾へ注いでいる二級河川である。

「吉田橋」は、河口から数百 m 上流に架っており、平成 7 年 11 月竣工。



「吉田橋」の欄干

「吉田橋」の欄干から、丸々と太った「錦鯉」が、数匹ゆったりと泳いでいる姿を発見した。

料亭の中庭で見る錦鯉は「泳ぐ芸術」として、丹精込めて世話されているが、上図のような田圃の中の河川でゆったりと泳ぐ姿は、恵まれた別世界の住人でないかと思われ、しばし見惚れていた。

河口に近いところに鯉がいる様は、湧き水と黒部川のお蔭であり、河口橋でその泳ぎが見られるのはここだけであろう。

是非、見ていただきたい田園風景である。



鯉が泳いでいる「吉田橋」の上流



「吉田橋」の下流 (YKK グランド(左側))

ところが、「吉田川」の河口には、鉄パイプとメッシュ張りの堅牢な構造物(下図)の橋が架っていた。

その目的は不明であるが、工事業者の往来のために架けられた臨時の橋でないかと思う。勿論、橋の名前はない。



鉄パイプ橋



「鉄パイプ橋」の上流



「吉田川」の河口(富山湾)



YKK AP 工業株式会社 黒部越湖製造所の正面



「黒部市吉田科学館」の正面玄関

黒部市吉田科学館は、「楽しみながら自然と科学に対する関心と理解を深める場」、「自然の神秘に感動し創造の喜びを知る場」を広く提供することを目的として、1986年に開館された。

円形のプラネタリウムの構造になっており、大人も楽しめる展示場であった。



その昔、会社の慰安旅行で訪れたところである。

写真の左側に「田中冬二」の記念碑がある。

冬二の父、吉次郎は、「たなかや」の分家とある。

右図：生地温泉 「たなかや」正面。



田中冬二の詩碑と詩歌(下図)

ふるさとにて

田中冬二

ほしがれいをやくにおいがする

ふるさとのさびしいひるめし時だ

板屋根に

石をのせた家々

ほそぼそとほしがれいをやく

がらんとしたしろい街道を

山の雪賣りがひとりあるいている

冬二は、少年期、両親と死別(病死)している。

その悲しい環境下、孤独の中で寂しさに耐えながら、それを作詩に向けられたものと思われる。

生地台場跡[富山県指定史跡]

この台場は、外国船渡来による海防上の必要から、加賀藩が1852年(寛永4)、12月に完成した。

尚、台場の高さは、63m、幅=8m、に大砲(5か所)が船で運ばれてきた、と記してある。そうだとすれば、相当高い所に設置されていた事になる。



生地台場跡

写真の大砲が実寸だとすれば、砲口が大きい割には、砲身が短いので、射程距離は短くて、射程精度も低いように思うが——？



台場の大砲

いくじはなとうだい
「生地鼻灯台」

地元漁業者は、1926年(大正15年)、作業安全のため、「槍ヶ埼灯柱」を建設した。



昭和26年、海上保安庁は、富山県で一番大きい沿岸標識として、「生地鼻灯台」(左図)が再建設された。

説明看板によると、

平成4年から無人化されている。

・光の届く距離は、約30km、

・光り方は、10秒間に1回、白いせん光を発する、とある。

灯台の外観は、白色と決まっているのかと思っていたが、この「生地鼻灯台」は、パンダのように白と黒の組み合わせになっていた。これは、日中、天候が悪くても見やすいようにした、と聞く。



生地鼻灯台



案内看板

2021年12月、犬吠埼灯台(千葉県銚子市)など4基が、初めて国の重要文化財(重文)に指定された。

現在、全国に3125基の燈台がある。

また、第9管区海上保安本部は、今年3月、津波の恐れがある場合、灯台の鍵庫を自動で解錠するシステムを全国で初めて導入し、11月5日の「津波防災の日」に合わせて訓練するという。(北日本新聞(2022年11月5日)掲載)

昭和 51 年(1976 年)、石川県の穴水営業所に勤務していた時、門前町の「猿山岬灯台」にお邪魔した。

敷地内に 2 所帯の官舎があり、灯台守の方から灯台の内部を案内してもらった。

先ず、灯台内部の階段手摺の真鍮をはじめ、全ての機器がピカピカで、階段の手すりを掴むのも躊躇われるほどであった。

レンズは、フレネルレンズ(※)と言い、拡散した光を束ねて、数十 km 先まで届ける構造は、見ただけで自分の身が斬られるような鋭いレンズであった。

※ 薄くカッティングした小型のレンズを何枚も重ね合わせた構造

また、官舎の前の花壇は、奇麗に整備されており、灯台守の言葉「掃除するのが仕事ですから-----」とおっしゃった言葉が忘れられない。

佐田啓二が主演の「喜びも悲しみも幾歳月」は、灯台守の映画であり、明治から昭和の 60 年頃までは、燈台は有人であった。

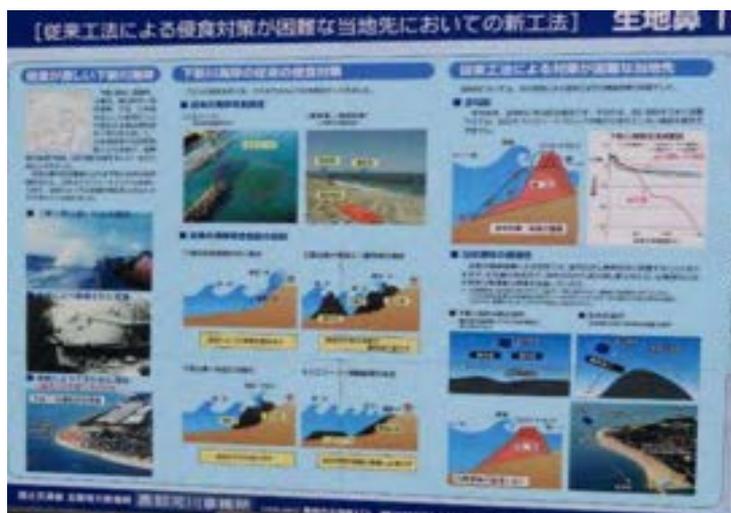
想えば、今日の日本の産業の発展を僻地の不便な所で支えて来た「灯台守」の人達に、あらためて感謝の誠を捧げたい。

海岸浸食対策(国交省)

国交省は、浸食を防ぐために、数種類の工法を模索しているようであり、この海岸線に PR 用の看板が散見される。

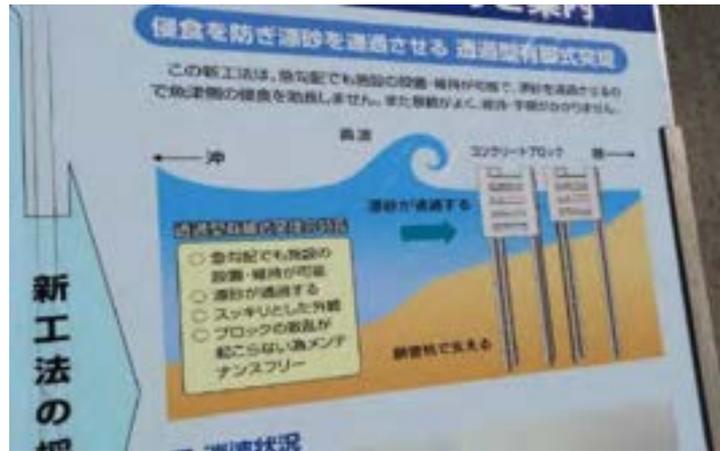
立て看板によると、海岸線の浸食が著しく、従来の海岸線と平行して施設されていた「テトラポット」では、早晚、沈下してしまう。

それは、海岸線から 150m 沖での深度が 30m となる急勾配であり、海岸線が南北線上となっていて、海岸線と平行した北風(季節風)の波が押し寄せてくる事が影響している。



「透過型有脚式突堤」の説明看板

そのため、この海岸では、表記の新工法「透過型有脚式突堤」を採用し、消波性能、堤内外の海水の交換性および集魚性などの向上を図っている、と記してある。

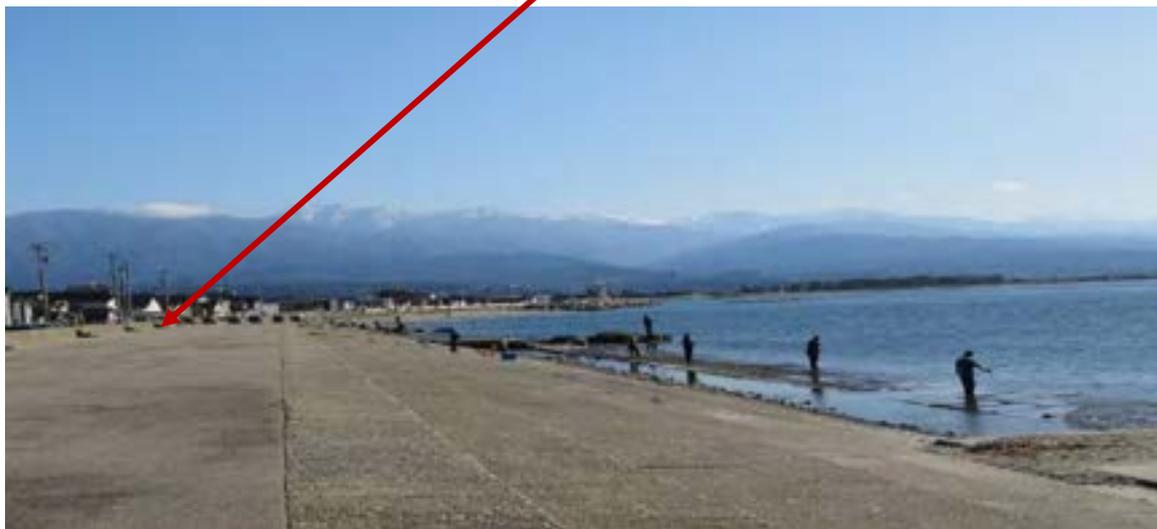


富山湾の海岸線に押し寄せる波（季節風、寄り回り波）に対する「防波堤」としては、この下新川海岸の防波堤は、昔の垂直に立った背の高い壁型ではないので、圧迫感はなく、美しく、かつ、堅

牢に構築され、景観に配慮された近代的な防波堤である。

当日は、快晴の日曜日であり、多くの釣り人が並んでいた。

上図の背の高い堤防は、下図の「左部分」である。



黒部市生地海岸の「透過型有脚式突堤」の全景

せどかわ ふるみずはし
背戸川の「古水橋」

背戸川は、住宅地図で事前に調査したところ、黒部漁港に流れている。



その河口橋は、「古水橋」となっており、現地を確認したが、暗渠になっていたため、「古水橋」を確認することができなかった。

その上流には、「名水橋」、「学苑橋」、「源兵衛橋」、「月見橋」と名付けた橋が数十メートルの間隔で施設されており、地元住民にも愛される中庭風の造作になっている。夏の夕涼みの集いの場として活用されていると思う。

背戸川に架かる中庭風の橋

右図は、背戸川、黒部漁港、生地中橋、生地鼻灯台などの観光案内の看板である。

また、「清水(しょうず)の里黒部」の説明看板もあり、それによると、元禄2年(約300年前)、松尾芭蕉が越中巡遊の途中に日蓮宗の「経妙寺」に休んだ時、庭にコンコンと湧き出る清らかな水を見て、「清水庵」と命名した、と記してある。



観光案内地図

更に、清水の里「生地」について、歴史的には、漁村の町として栄え、北前船による日本海貿易の拠点であったが、現在は、全国的にも珍しい内陸型の黒部漁港として整備され、漁業基地として発展している。

昭和60年に、環境庁の全国名水百選に選ばれている。

生地では、この湧き水を「清水(しょうず)」とよんでおり、町内管理と各戸管理を合わせると、約600か所もある、と記してある。

飲んでみると、柔らかい感じの「軟水」である。

サイクニストの皆さんへ

ロードバイクから降りて、見ごたえのある生地町を散策しましょう

黒部漁港と「生地中橋」

漁港と言えば、海岸線に「ハ」の字型の防波堤を構築し、その内側に船泊りを設けるのが一般的であるが、黒部漁港の場合は、海岸線から直線距離で約 400m 内陸側に船泊りがある。

何故だろうと思い、地元の君島さんに、昔からの経緯を含めて教えてもらった。

その昔、ここに「中通川」という川があり、その河口の内陸側の川べりに漁業者が小舟を係留していたが、寄り回り波(※)による浸食が激しく、海岸線より入り組んだ内陸側に開港しなければならないという結論に至った、という。

※ 寄り回り波の被害は、富山湾の東部地区に見られ、東から西(または北から南)への湾岸流が強く作用し、堤防の東側(または北側)に砂礫が蓄積し、反対の西側(または南側)が浸食される状況を言う。

その現象は、黒部川扇状地(海岸線)から富山湾内に向かって、急峻な勾配である海底の形も作用している、と聞く。



「黒部港北防波堤灯台」

このような環境から黒部漁港としては、海岸線に対して直角に突き出た従来の防波堤は、この地では馴染まないものであり、また地域民の了解も得られるものではなかった、言う。

君島さんの調査によると、1154年(久寿元年)、海嘯(「かいしょう」、津波の古称)によって、新治村の人家 370 余りが消失し、死傷者を含め甚大な被害が発生し、その後に復興した村を「生地村」と改名し、現在に至っている、と言う。



可動橋専用の信号機

生地中橋

上図正面の橋(欄干)は、有名な「生地中橋」可動橋で、魚津方面から入善方向を写している。

左側が富山湾、右側が船泊り黒部漁港。

左側の二階建ての建物は、「生地中橋」の管理所で、黒部漁港の事務所からの電話連絡により、橋の開閉操作を行っている。

時たま、そこから出てくる男性に会い、1日の勤務などを聞かせてもらった。



「生地中橋」の管理事務所

- 1人勤務の3交替制である事。
- 船の出入り以外に橋を動かす事とはできないので、可動状況を見学するのなら、早朝と帰り舟の夕方になる、との事。
- 橋の手前を起点として、橋の前方が右方向に移動するとの事。
- 橋を動かす前に、写真の右にある信号機が黄色の点滅になり、赤信号になってから稼働に入るとの事。



欄干に「生地中橋」



昭和 57 年 3 月 完成



「生地中橋」
(真中のやや左の建物が管理所)

「生地中橋」可動橋は、規模として日本で、唯一の「片側一点支持の回転式」である。

「生地中橋」は、写真の左奥が起点となって、写真の右手が手前の方向に動いて開放する構造である。

橋は、鉄鋼製アスファルト舗装。

黒部漁港の東北側に生地小学校がある。

登校時は、漁船の出航時間帯と重なるため、生地中橋は、小学生にとっては、邪魔のものであろう。

もし、登校時に黒部漁港を迂回した場合、子供の足で約15分要するであろう。

という事で、黒部漁港を横断する地下道が設けられている。

可動橋から漁港事務所へ約150m歩いた所に地下道入口がある。



地下道の入り口



地下道の内部

地下道の内部は、左写真のように明るく、躍動的な絵が描かれている。子どもたちが描いたのだろう。



黒部漁港の南側にある「魚の駅 生地」

君島さんから貰った資料によると、その昔、「越の湖」(長さ4km、幅1km、周囲6~10km)があり、現在の吉田川~中の川(現中橋の漁港水路)~高橋川の三本の川が集まっていた。

そのため、大雨になると川の水が逆流し、稲田が大きな水たまり、池のようになってしまい、「越の湖」は湿田になり「あわらだ」——あわら(胸)まで沈む状態——と言われていた、と聞く。

右図
浄土真宗 本願寺派 「順昌寺」
(黒部漁港の西側)



真宗大谷派 願楽寺



上町宮

立て看板によると、
本堂には、「光明本尊」(※)が残されている、とある。



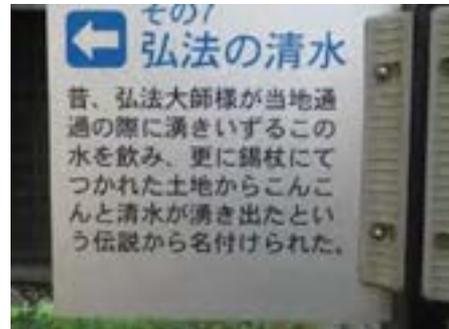
真宗大谷派 願楽寺 本堂

(※)、中国と日本の高僧が一幅で描かれた絵画。(室町時代の作品)

右図は、地酒、皇国晴酒造
（みくにはれしゅぞう）



黒部市内には、沢山の湧水がある。
どこの清水でも飲み水として使用され、柄杓が置かれている。



富山地方鉄道
電鉄石田駅（標高 3m）

電鉄黒部駅

前名寺(曹洞宗)

生地中橋から海岸線を魚津方向へ走ると、突然、格式のある門構えのお寺に遭遇した。曹洞宗「前名寺」である。

山門の前を掃除されていた住職に挨拶すると、わざわざ、本堂の背後の庭へ案内され、下記の説明を頂いた。



前名寺の山門、 奥に見えるのが本堂



本堂の正面には加賀梅鉢の紋



曹洞宗 前名寺
天満宮清水の寺



本堂裏の庭へ入る門

本堂は「梅鉢」の紋となっている。
元は「善名寺」であったが、前田公が隣の田村家へお立ち寄りの際、前田公の「前」に改めるよう、ご沙汰があり、「前名寺」と改められ、同時に、寺紋(加賀梅鉢)として賜ったとの事。

又、菅原道真公直筆の軸があり、60年に1回ご開帳、と言う。

聞きそびれたが、前田家の先祖は、菅原道真と言われている、のに関係しているのではないだろうか-----?

下図の写真では、判別できないが、池の中に湧き水が2~3か所ある。
そして、住職から、生地の清水の中で、竹を1m差し込むと湧水する、最も浅い所、と聞く。



庭の中にある清水池(直径約3m)

この庭をゆっくり散策するのに20分ほど、手ごろな休憩場所である。

前名寺の隣には、広大な敷地を持つ田村家の空き家が残っている。
展望台付きの家屋である。

前名寺の住職によると、その昔、前田公がお立ち寄りになる家柄であって、お寺を支えてもらった檀家でもあった、と言う。



田村家玄関の門構え



左図は、街歩きの観光用立て看板

観光案内の看板が豊富であり、黒部市は、優しいまちづくりに努めている、と思う。

浸食防止工事

(国土交通省 黒部河川事務所)

海岸線を走ると、下記の看板が数か所ある。
海岸線の浸食防止対策の紹介である。

国交省は、下新川海岸を浸食から守っています、と記してある。



立野根固消波工の説明(左右図)

又、右図のような突堤型の消波堤が数多く施設されている。
(約 100m 間隔)

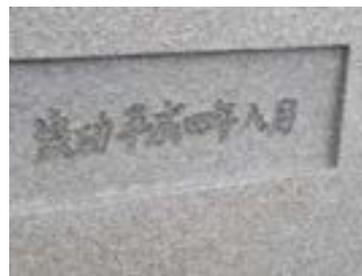


たかはしかわ かみたち
高橋川の「神立橋」

高橋川は、河口から約 250m の地点で、仁助川と合流し、そこから「二つ屋橋」、「新二つ屋橋」、「神立橋」を通過して富山湾に流れている、二級河川である。



「神立橋」と「新二つ屋橋」



サイクリング橋「神立橋」の欄干

	高橋川		
竣工年月	神立橋	新二つ屋橋	二つ屋橋
	平成4年8月	平成29年3月	不明



「新二つ屋橋」の左岸からサイクリング橋「神立橋」を見る。



「新二つ屋橋」の欄干から上流の「二つ屋橋」を見る。



「ふたつやはし」



「二つ屋橋」

「二つ屋橋」は、旧街道に架る橋らしく、現在、交通のメインは、「新二つ屋橋」となっている。

「二つ屋橋」の上流に水門が2か所ある。

「寄り回り波」の逆流を防ぐときに使用されるものと思われる。



水門2か所

「二つ屋橋」から上流を望むと、左前方に「黒部市総合公園」が見える。



黒部市総合公園
(右図)

で と かいぼうはし
出戸川の「海望橋」



出戸川の欄干と富山湾



出戸川の河口

出戸川は、前述の高橋川と同様、川の勾配が小さく、蛇行している。

「海望橋」は、同じ名前で二本の橋(歩道・サイクリング用+車道用)が架っている。

海岸線側が歩道とサイクリング用である。

ところか、下表のとおり、なぜか、両者の竣工年月が違っており、しかも、歩道とサイクリング用の橋が車道橋よりも先行して完成している。何故だろうか――?

竣工年月	海望橋	
	歩道・サイクリング用	車道用
	平成6年8月	平成9年3月



海望橋(歩道・サイクリング用)



サイクリング用の「出戸川」と竣工年月「平成6年8月」

「海望橋」の欄干に描かれた
花は何だろう。
黒部市の花「ツバキ」かも
—?
富山湾と調和して美しい。



「海望橋」の欄干のデザイン

右図
石田浜海岸



朝日町～入善町の防波堤は、高いが、ここ石田浜まで来ると、上図のように、砂浜の勾配は緩く、夏には、ビーチパラソルが似合う海水浴場である。

また、海岸線の曲線も美しい。

「富山湾岸サイクリングコース」から「石田フィッシャリーナ」の入口には、ハマちゃんの「釣りバカ日誌 13」ロケ地の看板が立っていた。



「釣りバカ日誌 13」のロケ地

「石田フィッシャリーナ」には、いろんなモーターボートが係留されており、何か豪華な感じがした。



石田フィッシャリーナ(右図)

くろせかわ いそばし 黒瀬川の「磯橋」

黒瀬川は、黒部市の十二貫野台地の丘陵地帯(標高約 250～400m)から、黒部川扇状地を流れている、二級河川である。

黒瀬川は、写真
のとおり、流れは
緩やかであり、灌
漑用水として広く
役立った後、石田
漁港の西側から富
山湾に流れてい
る。



黒瀬川の「磯橋」



「磯橋」から河口を見る

右図
「磯橋」の竣工は
昭和61年7月。



欄干に「黒瀬川」

「黒瀬川」～「片貝川」の海岸沿いには、下図の「飛砂防備保安林」が整備（松食虫対策も）されており、気持ち良いサイクリングコースである。



この日は、休日だったので家族連れのキャンプテントが4～5張り見え、子供達は元気よく動き回って、賑やかだった。

「おおしまキャンプ場」横のサイクリングコース



「飛砂防備保安林」の看板



「おおしまキャンプ場」の案内

かたかいかわ おちあいはし
片貝川の「落合橋」

片貝川は、二級河川であるが、富山県7大河川の一つとして紹介されている。それは、平均河床勾配が1/12(8.5%)、日本屈指の急流であり、川幅が約200mと大きく、橋脚の間隔も広いので、王者の貫禄を有している。

片貝川の河口橋は、「落合橋」である。

長い橋は、一般的に緩やかな湾曲(α)を成しているが、片貝橋は、見事な太鼓橋である。

大伴家持は、検知などの仕事で「越中」～「能登」に出張したが、詠まれた歌からして、最も北側と思われるのが片貝川である。

万葉集卷 17 4002

「片貝の 川の瀬清く 行く水の 絶ゆることなく あり通ひ見む」

大伴家持

[通釈]

片貝川の瀬を清らかに流れる水のように、絶えることなく、幾度も通って見続けたいものよ。



「落合橋」の全景（左岸下流より）

黒部市と魚津市との境界は、片貝川と思っていたが、「布瀬川」と言った方が正解かも――。

何故なら、黒部市と魚津市の行政境の大部分は、布施川である。

布施川は、片貝側の河口から約 1km のところで片貝川に合流している。



「片貝川」の歩道と車道

片貝川は、魚津市内を流れている河川であるが、鎌倉時代の洪水により布瀬川と合流した、と言う。

尚、片貝の上流には、蛇の模様をした蛇石が見られ、豊富な水量をもたらす神として祀られている。

又、上流の「東山分水工」は、去年、整備され、見物客で賑わっている。

下図は、「落合橋」の欄柱4基で、これが標準的なスタイルである。



「片貝川」



「落合橋」



「昭和59年10月竣工」



「おちあいはし」



「片貝川」の河口

「片貝川」の河口部は、写真のとおり、砂丘となっており、あたかも流路を塞いでいるように見えるが、実態は、写真の左側から富山湾へ流れている。
このスタイルは、「境川」と全く同じ景色である。

片貝川ほどの急流であっても、寄り回り波と季節風によって、河口部が塞がれてしまう証左である。

自然に任せて放置しておくとも、本当に塞がれてしまうので、定期的に水路を確保する工事が行われている。



片貝川の「落合橋」---太鼓橋

さけ採捕禁止札



農業用水路



自噴した水が農業用水路へ

「片貝川」から「経田港」の間には、いくつもの農業用水が流れている。カルバートボックスの形状で「しんきろうロード」を横断しているため、用水路を発見するのは容易でない。



半分以上塞がっている農業用水の出口(ボックスカルバート)

農業用水の出口は、季節風の流砂によって塞がれないよう、テトラポットで保護されているが、自然の力には勝てなく、徐々に埋もれて行く。



「経田港」



「しんきろうロード」は、魚津市の海岸線をほぼ南北に走る道路で、ミラージュランド～経田までの区間を言う。

晴れた日には、左に日本海を、右に北アルプスの山並みを眺める景観は、魚津市での最高のサイクリングコースである。

炎天下に蜃気楼の見えるのを期待して走るのも楽しみの一つである。

立て看板によると、

「世界で最も美しい湾クラブ」(本部：フランス・ヴァンヌ市)は、1997年に設立され、“湾の自然や固有性を保全する責務と経済発展の両立を確保しながら、その地域に住む人々の生活様式や伝統を尊重すること”を理念に掲

げて活動する非政府組織(NGO)である。富山湾は2014年10月、37番目に加盟した。



世界で最も美しい富山湾「魚の駅」

3,000m級の立山連峰から水深1,000mの富山湾まで高低差4,000mのダイナミックな地形・景観など、豊かで美しい神秘の海・富山湾の多彩な魅力に加え、県民総ぐるみによる環境保全の取組みなどが高く評価された。

日本では、富山湾のほか、松島湾(宮城県)、京都宮津湾・伊根湾(京都府)、駿河湾(静岡県)、九十九島湾(長崎県)が加盟している、と記してある。

諏訪神社

諏訪神社は、「しんきろーロード」に面している。

毎年、8月初旬に開催される「たてもん祭り」は、国の重要無形民俗文化財に指定されており、また、ユネスコの無形文化遺産にも登録されている。

「たてもん」は、高さ16mの大柱に、90余りの提灯を三角形につるして引き回す様は、勇壮豪快である。

しかし、その敷地が神社前となれば意外と窮屈な感じがした。



諏訪神社



魚津市の三大奇観の説明看板板



諏訪神社前の堤防「蟹気楼の見える街魚津」

かもかわ しんおにえはし
鴨川の「新鬼江橋」

鴨川は、魚津市内を流れる二級河川である。

片貝川の黒谷頭首工で取水し、農業用水として田畑を潤しながら、魚津市の中心街を流れ、「たてもん祭り」で有名な「諏訪神社」近くを流れて富山湾に注いでいる。

「鴨川」と言えば、京都の鴨川を思い出すが、魚津の「鴨川」の川幅は、そんなに広くなく、川沿いを散策するのに手ごろである。

下図は、富山湾を見て走る快適な「しんきろーロード」である。

写真のような快晴の時、カフェの二階から富山湾、そして遠くに能登半島が望めれば、さぞかし絶景だろうと思ったが、そのような店は見当たらなかった。



「鴨川」に架る「新鬼江橋」



「鴨川」の河口橋「新鬼江橋」から「鬼江橋」とその上流の「港橋」



「新鬼江橋」の欄干「鴨川」



旧北陸街道に架る「港橋」から
「新鬼江橋」を見る

「てんこ水」

鴨川の河口から約 300m 上流に餌指公園（えさしこうえん、富山県魚津市本町）があり、そこに伏流水が湧き出ている。
その湧き水を「てんこ水」と言われている。



とやまの名水「てんこ水」を通す土管

説明看板によると、
 魚津市の中心部を流れる鴨川の川底から透きとおった湧水が出る。
 川底に盛り上がり湧き出る形から、この水を「てんこ」と呼ばれて来た。
 この湧き水利用の歴史は、古く江戸時代初期までさかのぼり、片貝川や高台にある上野方からの地下浸透水が鴨川町上流で噴き出しており、ここに竹樋土管で導水し、各戸に給水、生活用水として来た。
 冬は暖かく、夏は冷たく、当時は、麺類を冷やすと最高の味として、住民から高く評価されている、と記してある。



本町2丁目の餌指公園（えさしこうえん）



説明看板



市街地を流れる「鴨川」

当家の菩提寺「栄明寺」は、この近くであり、参拝に寄った。

下図は、「栄明寺」の伝道掲示板である。

特に、左の「人生一生 酒一升 あると思えば もう空か----」は、私に当てた標語かも-----?



栄明寺の伝道掲示板

「米騒動発祥の地」の石碑

「しんきろーロード」沿いに「米騒動発祥の地」の石碑がある。

大正7年(1918年)、全国をゆるがせた米騒動は、7月23日の魚津町で起こった。

汽船へ米(コメ)の積み出し阻止が発端と言われている。

当時は、地元のコメ商人が買い付けたコメ(俵)は、銀行管理の倉庫に預けられ、そこから汽船に積み込んで出荷していた、と記してある。

その倉庫が米騒動の名残りをとどめている。

なお、米騒動の最初(火付け役)は、水橋地域であると言われている。



「米騒動発祥の地」の石碑



「旧十二銀行」の米倉



大町海岸公園にある「米騒動」のモニュメント



左図は、大町小学校の校門の横にある「上杉謙信の手植えの松」と「歌碑」。

歌碑には、天正初年(1573年)、上杉謙信が越後の精兵を引きつれて、越中へ

進入し、魚津城外にたむろした時の歌であり、時は初秋、過雁一声(かがんいっせい)、鎧のまま野伏した謙信が、思わず旅愁をそそられて、この一句を口ずさんだものと思われる、と詩碑にある。

「武士のよろいの袖をかたしきて枕に近きはつかりの声」

読み——もののふのよろいのそでをかたしきてまくらにちかきはつかりのこゑ
現代訳——鎧の袖の片方を敷いて仮寝をしていると初雁の鳴き声が枕もと近くで聞こえる。



魚津城は、松倉城の重要な支城(出城)として、北陸街道の要衝に築かれた平城であったが、「本能寺の変」の翌日に落城し、江戸時代の初めに廃城となった、と記してある。

魚津市立大町小学校の構内にある魚津城の跡地

かどかわ しんかどかわばし
角川の「新角川橋」

「角川」は、魚津市内を流れる二級河川である。
魚津市の山地を源とし、魚津市郊外の田畑を潤し、魚津南港(「魚津補助港」ともいう。)の横を通って、富山湾に注いでいる。
橋の名称は、角川書店(現在、KADOKAWA)の創設者である角川源義の名字となっている。



「新角川橋」の上流

河口から 100m 以内に「新角川橋」、「上口橋」、「角川橋」の 3 本の橋が架かっている。



「角川橋」から河口の「上口橋」、「新角川橋」

魚津市内の「しんきろうロード」を走っていると、各家屋の横または裏に伏流水が自噴している。

畑仕事の主人にその使い道を尋ねると、現在は、食事以外の水洗用、洗濯用、畑の散水に活用している、との事。



突堤の排水暗渠の出口はすべて南または西向き

魚津市内には、湧水箇所が多く、ボックス型の排水溝が 100m 位の間隔で施設されている。

中には、右図のように用済み破棄のものもあるが、釣り人に喜ばれている。



地下道の入口と「新角川橋」

「新角川橋」の左岸には、片側1車線の道路を横断するための「地下道」があるが、利用頻度は低いように思う。

海岸へ出るときに利用されているのであろうか――。

欄干
「しんかどかわはし」



説明案内板

「万燈台」

説明案内板には、

「万燈台」は、慶応4年(1868年)魚津町奉行が角川尻に建設した。

当時は、魚津港最初の燈台であり、暗夜の航路を守ると共に、台中に地藏菩薩を安置して海上安全を祈願していた。

当時の魚津港は、北海道航路や敦賀西回りの大阪行き航路であって、多くの船が越中米、新川木綿、魚類などを積み出し、非常に栄えていた、と記してある。

魚津には、右図のとおり、二つの港がある。両港の間隔は、約 1,500m である。



魚津北港と南港の道路標識

清水川・赤川

「角川」の南側に「清水川」、更に南側に「赤川」が、それぞれ富山湾に流れている、と住宅地図で確認していたが、サイクリング中に発見出来ず、再度、戻ってゆっくり走行したところ、両川とも、下図のとおり川幅が1m程度であり、橋の欄干は無かった。

畑仕事の奥さんに尋ねると、両川とも伏流水による流れである、との事。

地図によると「清水川」は、「角川」からの分流のようだが、近年、町内の水門管理者が高齢となり、その開閉操作が出来なくなったため、今は閉まったままとなり、「赤川」は雑草が繁茂し、川とは認識できない状態になっていた。



「清水川」



雑草が繁茂している「赤川」



富山湾に流れる「清水川」の河口部

「魚津水族館」と「ミラージュランド」 --- (魚津の水循環) ---

魚津水族館と遊園地ミラージュランドは、「赤川」と「早月川」の間にあり、多くの家族連れで賑わっていた。

魚津水族館の立て看板によると、

魚津市は、海拔0mから標高2,400m以上の山岳地帯までが、奥行きわずか25kmに収まる、大変急峻な地形から成り立っています。

この地形は、海中まで続き、水深1,000mまで達します。

この高低差3,400mを表流水(片貝川、角川、布施川、鴨川、早月川)、伏流水、地下水といった経路で水が流れ、富山湾に流れ出た水は、蒸発して雲となり、毛勝三山や僧ヶ岳に雨や雪となって降り注ぎます。

魚津の海と大地をめぐる循環の中で作り出される水は、優れた水質と豊富な水量を持ち、山や里、川、海の様々な場所で生きる多様な生物を育み、市民の生活や産業を支えています。



魚津水族館正面

このような水の循環がひとつのまちで完結している特異な地形は、世界的にも稀で、この循環の中で私たちのくらしが成り立っています。

これを「魚津の水循環」と名付けました、と記してある。

確かに、富山県民は、この自然の恵みを理解し、感謝しなければならない、と思う。

右図

水族館の右側に「フルボルトペンギン」が遊んでいる。

このペンギンは、南アメリカのペルーやチリの島々に生息し、体重=4~5kg、と記してある。



左図

遊園地

「ミラージュランド」
(水族館正面から)

はやつきかわ はやつきはし
早月川の「早月橋」

「早月川」は、その男らしい風貌から一級かと思ったが、二級河川である。
約10年前、「おにぎりサイクリング」に参加して、上市の眼目(さっか)の立山寺～早月川の上流にある「剣いおりの郷」まで走った事を思い出した。
標高400m越えが初めての経験であり、四輪のサポーターから声援を得ながら、やっと昼食会場へ「ビリのビリ」で到着した事を-----。
その間に、若い連中は、更に上流の馬場島まで走った、と聞き、高齢者の悲哀を感じた。

詩吟の世界では、郷土にまつわる漢詩を吟ずる事が多く、大伴家持が早月川を渡った時の詩が膾炙されている。

「立山《たちやま》の雪し消らしも延槻《はひつき》の川の

渡瀬《わたりせ》 燈《あぶみ》 浸かすかも」

大伴家持 『万葉集』 卷17-4024

(通釈)

「立山の雪が融けだしたらしい 延槻川(早月川のこと)の渡瀬で燈(あぶみ)が水に浸かってしまったよ」



「早月川」の左岸から魚津(観覧車)方面

「早月川」の欄干には、富山湾の「ホタルイカ」、「白エビ」、「ブリ」などの額が嵌められている(下図)。



「ホタルイカ」



「白エビ」



欄干には「はやつきはし」、「早月橋」、「平成 15 年 8 月竣工」

「これは川ではない 滝だ!!」

「これは川ではない 滝だ」は、内務省技術顧問の「デ・レイケ」が常願寺川を形容して語った、と長く伝えられてきたが、最近、訂正された。

ダム工学会ダム技術史研究部会員の貴堂巖さん(富山市)と立山カルデラ砂防博物館の是松慧美(えみ)学芸員の見事な連携プレーにより新説が実証された。

それは、「これは川ではない 滝だ」と最初に発言したのは、富山県の土木課長心得の「白井倫直氏」が「ムルデル氏」を早月川に案内した 1883 年(明治 16 年)の言葉である、その事が県会議事録に記載されていることを発見し、これを白井芳樹氏(全日本土地地区画整理士会長)が説明し認められた。

(令和 2 年 9 月 17 日の北日本新聞に掲載)



「しんきろうサイクリングコース」は「早月橋」の左岸で直角に曲がる。

岩瀬浜駅まで 17km、
生地駅まで 14km。
(写真右下に観覧車)

こぜんかわ 小善川の橋

早月川から滑川漁港までの約 4Km の間に、9 本の農業用水が富山湾に流れていて、「小善川」はその一つである。

また、この間、海岸線と並行して「しんきろうサイクリングコース」が整備されており、「富山湾岸サイクリングコース」の一部となっている。

富山湾に辿り着いた用水は、一度、海岸線と並行して流れており、何か理由があるのだろうと思った。

この「横の用水路」は、富山湾に辿り着いた用水を数本まとめて、富山湾に放流するための水路であった。

想像するに、突堤の数を減らしたいのであろう。

何故なら、建設費の軽減と堆積した砂の排出費用(年経費)が軽減できるから、と考える。



突堤と排水口



用水路



小善川の上流(左)と河口部(右)

[坪川の一里塚]

滑川市坪川に一里塚がある。

立て看板によると、

幕府は、全国の主な街道に対し、江戸の日本橋を拠点にして、1里(約4km)ごとに塚を築いた。

塚は、街道の目印になると共に、旅人の憩いの場にもなっていた。

越中には、23基の一里塚が築かれたが、現在、残っているのは、朝日町と滑川市だけである、と記してある。

中央の最も高い石塔には、「法華経」と彫られている。

他の4塔にも字体は見えるが、何と書いてあるか、理解できなかった。



「一里塚」の看板

「坪川の一里塚」の全景

右図
海浜公園にある可愛らしい村社「富士社」



つぼかわ すきかわ
坪川用水(鋤川)の橋

現在、坪川用水と称されているが、昔の名前は、「鋤川」であろう。
滑川漁港の整備と共に、鋤川の河口は、下図のとおり、滑川漁港の荷揚げする敷地(コンクリート舗装)に潜っている。



滑川漁港に流れ込む「坪川用水」



「滑川漁協冷蔵庫」の横を流れている「坪川用水」



滑川漁港に停泊している「立山丸」

「立山丸」は、漁業資源調査のため、富山湾～日本海まで活動している富山県唯一の大型漁業調査船である。

主な業務は、海洋観測調査、プランクトン、魚卵・稚仔採集調査、海底地質調査、ホタルイカ採集調査、ベニズワイ採集調査、スルメイカ釣り試験操業、深海生物の種苗放流調査等、とある。



滑川漁港

滑川と言えば「ほたるいか」であるが、全部メスという。
食しているのは、産卵のために浅い所に上ってくるのを捕獲したもの。

あの丸々と太った脂ののった「ほたるいかの酢味噌」は、晩酌にもってこい、である。

中川放水路～白岩川の高月海岸は、高浪で有名であり、下図の避難場所の案内看板が海岸線道路で散見される。



避難場所の案内図

中川放水路の「^{こしば}小柴橋」と「ほたる橋」

「中川放水路」は、^{すきかわ}鋤川の水を利用している。

中川放水路の河口橋は、河口から約 100m の「小柴橋」であるが、その約 100m 上流に「ほたる橋」が架かっている。

何故か、二つの橋の欄干に記されている川の名前が、下表のとおり、別名である。

これについて、滑川市役所に尋ねたら、中川放水路の愛称を市民から募集したところ、たくさん集まり、選定委員会で「のぞみ川」と決まったため、現在、「のぞみ川」が愛称となっている、との事。

	小柴橋	ほたる橋
河川の名前	のぞみ川	中川放水路
建設年(竣工)	平成 7 年 3 月	昭和 62 年 3 月
海岸線からの距離(m)	約 20	約 120



「小柴橋」から上流の「ほたる橋」を見る。
右側が「ほたるいかミュージアム」



「のぞみ川」に架る「小柴橋」



「中川放水路」に架る「ほたるはし」

道の駅 「ウェーブパークなめりかわ」

「ほたるいかミュージアム」と「タラソピア」の富山湾側に「足湯」がある。
富山からここまで走って、ちょっと休憩する場所に丁度良い。

特に、晴れた日には、正面に富山湾、左から能登半島、右に黒部市まで、一望できるので、心身共に癒される。



「足湯」は2階



協力金は100円

下図は、伏流水を集めた小川である。

「ほたるいかミュージアム」～「タラソピア」～「はまなす公園」から、約100m 富山寄りに流れている。



名前のない小川(左)と富山湾に注ぐ河口(右)

いちはら
櫛原神社(国登録有形文化財)

滑川市「和田の浜」を過ぎると、格式高い「櫛原神社」の裏手に出る。

滑川市の大社であり、正面は、旧北陸街道に面している。

境内にある案内板を読んで歩くと3～40分は要し、1,000坪もあろうと思われるほど、広い神社である。

現在の本殿は、1872年(明治5年)、拝殿は、1915(大正4年)年に建築されたもので、境内の2つの鳥居(1860年および1921年の建築)と合わせて、国の登録有形文化財に2017年(平成27年)6月28日に指定された、と記してある。



左図
延喜式内社
櫛原神社

〔説明看板の要旨〕

- ・御祭神——素盞鳴命、菅原大神、市大稻日命
- ・合祀神明社——天照大神、豊受大御神
- ・境内末社——琴比羅神社、稲荷神社、道祖信、平和の塔
- ・由緒——鎮座年次は不明、早月川の扇状地に私たちの先祖が営みを始めた時、自分たちの先祖を守り神としてお祭りしたのが発祥であろう、と記してある。



左図

「平和の塔」と称し、日清～日露～第二次世界大戦の英霊の御霊をお祭りし、



世界平和と国家の安寧を祈っている、と記してある。



「平和の塔」(左・右図)



左図
 櫛原神社境内にある琴比羅社

右図は、松尾芭蕉の句



芭蕉は、「奥の細道」の途中、滑川に宿泊しており、その時の作句が境内に紹介されている。

「しばらくは 花の上なる 月夜かな」

松尾芭蕉

(通釈)

「満開の花だ。そして、その上に月が上った。しばらくは月下の花見ができそうだなあ」

右図
 諏訪社
 (武平太町)



荒町児童遊園にある、
立て看板によると、
元禄2年(1689年)、
松尾芭蕉に同行した曾良
は、奥の細道の旅の途
中、7月13日(新暦では
8月27日)の夕方に滑
川に着いた。旅籠は、
川瀬屋という説が有力
で、この辺りにあった、
と記してある。



荒町児童遊園

宝暦13年(1763年)に『俳諧早稲の道』を著した川瀬知十は、翁の宿泊を記
念して自家の壇那寺である徳城寺の境内に、

「早稲の香や分け入る右は有磯海」の吟詠を刻んだ句碑(下図)を建立した。
(通釈)

早めに実った稲の香りがするなあ この道を分け入って右に行けば かの有
名な有磯海だ。

徳城寺は、この頃、まだ新(荒)
町の海辺にあったが、明治13年
(1880年)に、句碑とも現在地に移転
した、と記してある。



句碑の後ろが富山湾

中川の「^{ゆきしま}雪島橋」+「^{おちあい}落合橋」

「中川」は、滑川市の市街地をゆっくりと流れる二級河川である。
「落合橋」から上流を眺めると、中川が茂った樹木の間から流れ出て来る景色
であり、一服の清涼剤と言う感じであった。
今回の旅で面白かった橋が一つあった。

それは、河口まで約 100m のところに「雪島橋」と「落合橋」の二本の橋が架っている理由である。

両橋の間隔は、約 20m で下表のとおり、それぞれの橋が「一方通行」になっている。最も下流に架っている橋は「雪島橋」であるが、車道として見た場合、2本の橋でもって往来できるので、この場合、2本併せて「河口橋」と言わねばならないようだ。

それぞれの橋の幅は少し狭いが、四輪車のすれ違いが出来ないという訳ではなさそうだ。

何故、同一場所に 2本の橋を架けたのだろうか-----?

近所の方に尋ねたが、「昔から掛かっていた」との返事しか得られなかった。

後日、滑川市役所に尋ねたところ、16世紀後半の瀬羽町は、現在地より海岸にあつたが、高波の被害に悩まされ、江戸時代初期に現在地に移され、その時、北陸街道がここで直角に曲がらざるを得ず、車両などの安全を考え、今のような二本の橋にした、との事。

	雪島橋	落合橋
竣工年月	昭和 39 年 3 月	昭和 35 年 12 月
一方通行	西 → 東 (富山 → 魚津)	東 → 西 (魚津 → 富山)

この橋の富山寄り地域を「瀬羽町(せわまち)」と称し、その昔、宿場町として栄えた回廊、と友達から聞いた。

現在、宿場回廊としての町おこしに努め、生まれ変わろうとしている。

また、平成 22 年、店舗兼住宅、酒倉、麴蔵、衣装蔵の 4 棟が国登録有形文化財に登録されるタイミングで、新たな町おこし事業を進めている、とも聞く。



「落合橋」から「雪島橋」を見る。その先が富山湾



欄干の表示「ゆきしまばし」



「雪島橋」



中川



おちあいはし

食堂「ハレとケ」

丁度、昼食の時間になったので、「坪川こんぶ」のキャンバンの食堂に入った。店の正式名は「ハレとケ」(昔は「坪川こんぶ」店らしい)と言う。

奥の方では、女性群で賑やかだったので、私は、入口のテーブルでお薦めの「玄米ごはんセット」を注文した。

聞きなれない、意味不明の店名なので、店員さんに尋ねた。

パンフを貰って読んでみると、「ハレとケ」とは、柳田邦男によって見出された世界観の一つで、

「ハレ」=「非日常」、

「ケ」=「日常」という意味で、



食堂「ハレとケ」の正面玄関

平日は、玄米ごはんと具たくさんの汁物を、非日常は、好きなもりを楽しむ、というメリハリのある食生活を推奨する意味であり、それを店名にしたとの事。



玄米ごはんセット

「玄米ごはん」は、もちもちとしたご飯であり、お勧めである。帰りに、お土産話として3食求めた。

「なめりかわ宿場回廊」の看板
(下図)



瀬羽町(せわまち)は、江戸時代から宿場町として栄え、昭和の時代は「滑川銀座」と呼ばれていた、と言う。

戦後、火災が発生し、衰退したが、最近、カフェなど、都会的、ユニークな店が進出している。

そして、錆びついたトタン家の中に、真新しいモダンなカフェが開店し、観光客が訪れる瀬羽町となり、活気を戻そうとする意欲があらわれていた。

「なめりかわ宿場回廊」の看板が所々に設置されて、サービス良く説明され、観光に力が入っていた。

あんきよ 沖田川放水路の暗渠

「沖田川放水路」は、最近(平成29年3月)、完成した箱型の暗渠構造の水路である。

その放水路は、旧北陸街道を横断しているが、道路の横に大きな看板があり、親切で分かりやすかった(次頁参照)。

[説明書きの概要]

「沖田川」は、かんがい用排水路として整備されてきたので、河川としての排水能力は小さく、これまで洪水による被害がたびたび発生した。

平成 13 年 6 月 29 日の豪雨で 459 棟、平成 24 年 9 月 11 日の豪雨で 45 棟の浸水被害が発生した。



コンクリート製のフェンス型堤防

富山県では、浸水被害の解消を図るため、滑川市が整備する都市計画道路加島町下島線の地下に箱型の水路を設置し、洪水を富山湾に放水する放水路として、平成 14 年に事業に着手し、平成 29 年 3 月完成した。

洪水時には、分流地点において分水ゲートを閉じ、沖田川の流水を全量放水路へ流すことにより、下流地域の治水の安全性を高めた、と記してある。

2023 年 7 月、富山県に初めてと言っても良いかと思うが、「線状降水帯」による浸水被害が発生した。

この原因は、水門を閉じるタイミングに問題があったようである。

ハードと共にソフトの手当てが肝心なように思う。



「沖田川放水路」の看板

「加積雪嶋神社」

神社の正面には、立派な狛犬と手水舎があり、右に曲がったところに社殿がある。

広い敷地だが、整理整頓が行き届き、奇麗に掃除されている。

地域の皆さんの気持ちが分かる。



加積雪嶋神社の社殿



神社前の堤防に描かれた「魚の絵」(左)と「祭りの絵」(右)

田中川の「幻の橋」

地図上に「田中川」はあるが、旧北陸街道を走っていると、それらしき川には気づけなかった。

そこで、地図を頼りに、今、走ってきた道に戻って、探したところ、道路から山側へ5~6m離れた所に、川幅が約5mもある立派な川を発見した。

川の横で畑作業している奥さんに川の名前を確認したところ、間違いなく「田中川」であった。

しかし、道路下を暗渠で流れていて、欄干も無く、いかも海側が5m位の防波堤となっているので、川が横断しているとは、とても認識できない。

先ほどの奥さんの話では、防波堤の海側に昔の欄干が残っている、と聞いたので、防波堤に登って確認してみた。

左図が防波堤の上から撮った写真である。

滑川市(高月海岸地区)の防波堤は、「寄り回り波」対策のため、非常に高い。

車両の右ラインが堤防(堤防の右側が富山湾)



田中川の「欄干」(名残りが見える)と「防波堤」

右図は、高い防波堤
(約 5m)の上から見た田
中川の昔の欄干。

河口に砂が堆積しない
よう、テトラポットが二
重にある。



田中川の上流



大岩道への道しるべ



「立山・大岩道みちしる
べ」の石碑と案内板

案内板によると、
この石造物は、文化8年
(1811年)に作られた、
大岩山日石寺への「道し
るべ」である。

石材は、早月川の花崗岩。

江戸時代、立山・大岩への参詣者が、旧北陸街道を通じて全国各地から集まり、当地は宿場町として栄え、街道の分岐点として設置されていた。

平成 27 年(2015)、沖田川放水路及び高潮堤設置工事に伴い、現在地に移設された、と記してある。

左図:「恵比寿神社」
地元の漁師さんが、豊漁と
海上の安全を祈願する。



左図
「勇者の碑」

碑の前の「顕彰文」は、下記のとおり。

「昭和 54 年 3 月 31 日、この海岸に荒れ狂う「寄り回り波」が押し寄せ、釣り人が離岸堤に孤立して助けを求めています。

富山県警察機動隊が緊急出動し、残りの一人を救助中に激波の直撃を受け、殉職された。この人命救助に敢然と立ち向かった個人の偉業を永久に賛える。」

滑川市 高月町 加茂神社

旧北陸街道沿いにある加茂神社には、鎌倉時代の武将、源義経にまつわる伝説が残っている。

源義経が奥州下向の際、同神社に立ち寄って、武勇長久を祈り、冠を奉納した。

その冠を珍しいと思い、かぶった村人 48 人が皮膚病に罹ったことから「四十八カンパ」の伝説として、地元住民の間で語り継がれている。



(「令和 2 年 11 月 23 日、北日本新聞、空からわが町」) 加茂神社正面



左図
加茂神社は、「上市川」の河口の右岸にある奥行きが深い神社である。



「加茂神社」内にある石碑「古戦跡」



「平和の塔」

旧北陸街道沿いには、一里塚のほか、神社、仏閣が並んでいる。



旧北陸街道

昔の北陸街道の名残が感じられたので、パチリ(左図)



右図:八幡社



一里塚(左・右図)

立て看板によると、江戸幕府は、東海道、中山道、北陸道に榎樹(エノキ)を植えさせ、一里塚を築いた。

浜街道と言われたこの街道は、加賀藩主・大聖寺藩主の参勤交代の道として決められた重要な北陸幹線道(官道)で、この一里塚は、江戸時代初期に築造された、と記してある。



左図:諏訪神社

高月海岸の防波堤は、背が高い。

この防波堤は、上市川の河口(右岸)から始まり、滑川の「ほたるいかミュージアム」まで続いている。



がっちりとした高月海岸の防波堤



防波堤の高さ、5mもあろうかと思う高月海岸の防波堤

上市川の「魚躬橋」^{うおのみ}

上市川は、富山市と滑川市の境界と認識していたが、細かい事を言えば正しくない。

地元の友達、松浦さんから聞いた話だが、その昔、上市川の下流部は蛇行していて、洪水の原因になっていたため、直線化工事が行われた、と言う。

その工事により、滑川市魚躬地区が二分され、上市川の左岸の一部は、現在も滑川市となっている。



上市川の河口

その蛇行の様子は、現在、農業用水として利用されているので確認できる。
およそ、季節風により砂が河口部に堆積し、蛇行せざるを得なくなったものとも考えられる。

この水橋地区には、常願寺川(一級河川)、白岩川(二級河川)そして上市川(二級河川)の3本の河口が、約3kmの間に集まっている大きな扇状地帯である。

また、これら3本の河口は、川幅一杯の水量が、ゆっくりと流れているので、ここだけを見ていると富山の急流河川と言うよりも大河の趣である。



「うおのみはし」から上流を望む



「上市川」



「魚躬橋」

橋の欄干には、写真のように、一つは「河川の名前」、二つ目は「橋の名前(漢字)」、三つ目は「橋の名前(ひらがな)」、そして四つ目は橋の「竣工年月」のプレートがある。

これスタイルは、各河川共通である。



「うおのみはし」



「昭和49年3月竣工」



八幡社(富山市 水橋町魚射)

げじょうかわ ことひらはし
下条川の「琴平橋」

「下条川」は、「上市川」から取水した農業用水であり、水橋旧町内を横断し、白岩川に合流している(白岩川の「浦の橋」から下流約200mの所)。

その河口に「琴平橋」が架かっている。

この時は、下図のとおり、ペンキ塗りたてと言わんばかりのコンクリート橋であった。

なお、「琴平橋」の横に「金刀比羅社」がある。

又「金刀比羅社」の鳥居の横に、水橋町稻荷町で私塾を開いた竹甫先生の石碑がある。



ペンキ塗り立のような「琴平橋」



金刀比羅社



白岩川の河口右岸にある「金刀比羅社」説明看板

竹甫先生記念碑

説明によると、
中国道教の庚申信仰(こうしんしんこう)によるもので、60日に一度めぐってくる、庚申(かのえさる)の日の夜だけ、一晩中、眠らずに、みんなが集まって健康長寿を祈り、商人は商売繁盛を、漁師は大漁を祈願するなどの習わしがあった、と記してある。



竹甫先生の記念碑

先生は、本名を竹山屋又六といい、東水橋町で私塾を開き、門弟を養成した、と言われる。

明治16年(1883)門弟中建立とある。

右図:弘法寺
孵場跡と向き合っている



案内板によると、
当時、「水橋川」(*)の河口は、「水橋湊」として重要な海運港でした。



江戸後期から大正の初めまでは、北前船(木造)で、明治末期から昭和十年頃までは、汽船で、主に北海道との往来により、米穀や縄筵(なわむしろ)などの移出、魚粕肥料・石材・木材などの移入で、港町は賑わっていました。

河口の水深が浅いため、大船の進入は困難で、この場所から沖に停泊中の北前船や汽船まで

水橋港 孵場跡(はしけばあと)

荷物の運搬に孵(はしけ)が利用されました。孵は、

木造船で三・四人の人力で櫓を漕ぎ、孵場での荷扱いは、若衆や「おかか」たちで組織された仲仕組が仕切っていました、と記してある。

(平成十三年十月 富山市教育委員会)

※ 「水橋川」とは、

その昔、常願寺川は、白岩川の支流であった。

その合流地点から河口までを「水橋川」と称していた。

なお、水橋港の孵場(はしけば)常夜灯の周辺で働いていた、若衆や「おかか」の怒りが、「米騒動」の原点とも言われている。

白岩川の「浦の橋」

白岩川は、大辻山から高峰山の西側斜面の谷筋を水源とし、立山町を流れ、富山市水橋を経て富山湾へ注ぐ二級河川である。流長は、25kmと短い。

太古から、富山市周辺の平野は、立山連山を源流とした「常願寺川」そして「神通川」の二大河川の扇状地である、

特に、水橋地区は、常願寺川、上市川、白岩川の各河川の河口が集まっており、河床勾配が小さいため、雨期に氾濫し、水害に苦しんだ、と松浦さんから教わった。

明治25年(1892年)、砂防工事で有名なオランダ人のヨハネス・デ・レーケの指導により、常願寺川の暴れ川を解消するため、真っ直ぐな川を新設し、これを「常願寺川」とした。その後「水橋川」は、「白岩川」と名称を変更し、それぞれが河口を持つことになった。

更に、昭和49(1974年)に洪水調節と農業灌漑を目的としたロックフィル+重力式コンクリートの白岩川ダム(複合ダム)が造られ、洪水から解放された。

なお、白岩川河口(下図)の川幅は、短縮された現在でも、約100mもあり、川幅一杯の水量を持つ堂々とした河川となり、庄川、小矢部川のような大河の風貌を有している。



堂々とした白岩川の河口



「浦の橋」左岸から、河口の水橋西浜町の方を望む



「浦の橋」の欄干、左から「浦の橋」、「白岩川」、「昭和52年10月竣工」



「浦の橋」から上流を望む

かつては、小舟の停泊地として利用されていたと言うが、今は、川沿いの桜並木が美しく、夏は、東西橋の完成を記念した「橋祭り」が開かれる。

2021年9月25日(土)、快晴の下、家族連れのハゼ釣り太公望で賑わっていた。



岩川の右岸(河口)から白岩川を見る

「グーパー標識」

国道8号線の歩道を走っていると、下図の標識をよく見るが、ご存知ですか。正規の道路標識ではありません。



「グーパー標識」

冬季間において、道路の凍結防止剤を散布する区間を明示する標識です。

「パー」が散布の始まり、その先にある「グー」が散布の終わりを示しています。この標識は、ブレーキを踏む頻度の多いところ、信号の手前、勢いの付く坂道、カーブや橋梁、トンネルの出入り口、車線合流部などにあります。

「パー」の標識には、力士が塩をまいた時のように、手から塩が飛んで行くデザインとなっていて、現場作業員に分かりやすくした、との事。

(建設省富山事務所で聞く)

じょうがんじがわ いまがわはし
常願寺川の「今川橋」

浜黒崎のキャンプ場から東へ数百メートル走ると、常願寺川の河口に出る。そこから「常願寺川」の上流を見る(下図)と、快晴の青空の中に橙色の欄干と雪を被った白い立山連峰の景色は、誠に雄大であり、心が洗われる。そして、少し弓なりになっている今川橋の人工美は、富山県下の河口橋の中の王様とも言える。



「常願寺川」河口(左岸)から「今川橋」を見る

「今川橋」は、サイクニストにとって、通り馴れた県道1号線であり、また、一級河川に架かる旧北陸街道でもある。

その日は、やや強い北風が吹いていたので、海から上流に向かって白い波が打ち寄せており、逆流しているように見えた。

また、河口幅=約350mのうち、中洲は子供たちの遊び場となっており、実質的な河口幅は5~60mしかなく、流れが窮屈そうに見える。

現在の車道橋は、1963年(昭和38年)、歩道橋は1982(昭和57年)に建設され、塩害がひどいため、2024年までに新しい橋に架け替えられる、と聞く。



欄干に「いまかわはし」



「常願寺川」



「今川橋」：河口側に歩道橋、その右側に車道橋



「今川橋」中ほどから河口を見る

上図のとおり、常願寺川は、富山湾に流れる直前で、その河口の大部分が中洲となっている。

左側の土手から中洲へ出入りすることができ、釣り人のほか、家族連れの子供たちが走り回っていた。

この中洲は、冬の季節風、寄り回り波により、河口部分が徐々に塞がれて来た結果だろう。

下図は、今川橋の中程から川底を覗いた写真である。

足元の水深は、1~2 m位だろうか――、その透明性から川底の丸い小石が見える。

この透明度は、庄川、小矢部川(1級河川)と大きな相違点であり、日本一の急流の証でもある。



「今川橋」欄干から川底の丸石を見る

2020年11月22日(日)、北日本新聞「声の交差点」に掲載された記事によると、

「なぜ、大伴家持は、早月川、片貝川を詠んでいるが、常願寺川を詠まなかったか」について、

その当時の常願寺川は、現在のように一本化されておらず、幾筋もの細流となっていて、立山の川としての認識が無かったのではないか-----? と富山市内の小坂武司さん(85歳)が投稿されている。

なお、黒部川の「下黒部橋」でも同じテーマについて、記述したが、二つの見解、いずれも納得できる。

(番外編)

「霞提(かすみてい)」

「新常願寺橋」の近くに、下図の霞提についての説明石碑がある。



説明石碑

説明石碑によると、

昔は、現在のような強い堤防を作ることができなかつたため「霞提(かすみてい)」と言って、堤防の一部を意識的に「カット堤防」が造られた。

大水が出たときは、一旦、ここから水をあふれさせて、水の勢いを弱くし、下流の水量を減らし、水害を抑えることが出来た。

川の水が少なくなれば、霞提の水を本流に戻して、堤防の破壊を防げた、と記してある。

常願寺川の「ほうすいはし豊水橋」

次頁の写真は、「両岸分水工」と言い、常願寺川の上滝駅から上流、約2kmの所にある。

ここから更に約3km上流に「横江頭首工」という取水ダムがあり、その水は下図の構築物(両岸分水工)によって、「常東用水」と「常西用水」用に、5:5に分水されている。



渇水期
(分水工)

「兩岸分水工」

豊水期
(分水工)



写真に写っている滝のような水は「常西」へ、その滝の間の写っていない所に落ちた水は「常東」へ流れる構造になっている。

「豊水橋」は、この分水工で分水した水を左岸の常西用水エリア(富山市街地)へ送水するため、常願寺川に架けられた「水路専用橋」である。

私がこの橋に出会ったのは、平成 24 年(2012 年)だが、先ほどの「分土工」の機能的な美しさとこの橋の近代的な美しさは、景観にマッチした大きな建造物であり、それを鑑賞したくて、年に数回ここを訪れる。



常願寺川の「豊水橋」 --- 常西への連絡水路橋



平成 20 年 3 月竣工の「豊水橋」



「豊水橋」の最上部

「豊水橋」の上部は、車 1 台通ることにはできるが、対岸には道路は無い。欄干には「平成 20 年 3 月」の竣工と「豊水橋」の名前が記してある。



安政の流石---重さ 24 トン

写真右の碑文によると、

この大きい石は、安政 5 年(1858 年)2 月 25 日の大地震による大鷲(おおとんび)・子鷲の山峰の崩壊と 3 月 10 日の地震により、真川が決壊して山津波となり、大岩・大木を押し流し、富山市東部を泥土と化した。

更に、4 月 26 日、降雨続きで融雪水の氾濫・湯川ダムの決壊によって大洪水となる。

世に「大鷲崩れ」と言われ、西の番から富山市内の柳町にかけて、一面泥流に埋まった。その時の流石である、と記してある。

富山県の一級河川のうちでも、黒部川、早月川と共に、常願寺川も急流で有名だが、その平均河床勾配が 30 分の 1 (30m 進んで 1m 下がる) と、世界で最も急な河川と言っても過言ではない。



常願寺川「雷鳥大橋」

新鋭の「常西幹線発電所」

「常西幹線発電所」は、平成27年4月に着手し、令和2年7月6日に運転を開始した新鋭の水力発電所で、富山市の流杉浄水場の下流に建設された。



- ・発電方式：流れ込み式
- ・水車形式：S形チューブラ水車
- ・発電機：横軸三相誘導発電機
- ・出力：最大 460kW
- ・使用水量：最大 3.32 m³/s
- ・有効落差：最大 18.10m
- ・年間可能発電電力量：259 万 kWh

年間可能発電電力量の259万kWhは、一般家庭の860世帯分に相当する、と記してある。

「常西幹線発電所」(富山市流杉)

すわぼし 諏訪川の「諏訪橋」

諏訪川は、浜黒崎キャンプ場の岩瀬寄りに流れている準用河川(※)である。

旧北陸街道を横断する諏訪川に「諏訪橋」が掛かっている、と富山市役所の河川課の地図で確認していたが、暗渠になっていたためであろう、確認できなかった。

また、諏訪川の神通川寄りに「横越排水」が、常願寺川の左岸一帯の農業用水を集約した排水路がある、と聞いていたが、これも確認できなかった。

(※) 準用河川(じゅんようかせん)とは、一級河川及び二級河川以外の「法定外河川」であり、市町村長が指定し、管理する河川との事。



写真左から「赤田川」、「平成8年2月竣工」、「亜流辺橋」の欄柱



「古川」が富山湾に流れる手前(暗渠部)で水量を二分している壁

むらかわ ひかた えはし
村川の「日方江橋」

富山県立富山学園の敷地境に準用河川の「村川」が流れている。
この旧北陸街道を横断する橋は、その地名をとって「日方江橋」と名付けられている。

昭和9年の竣工は、今から90年も前であり、私が記録した河口橋の中で、最も古い構造物である。

そのため、橋の上流側に専用の歩道橋が、設けられている(次頁)。



村川に架る「日方江橋」、左が車道(海側)、右が歩道橋。

農業用水などの小川が、富山湾岸サイクリングコースを横断する時は、すべて暗渠構造になっており、また橋の欄干らしき物が無いので、河川を見出すことは大変困難である。

そこで、出発前に地図などで、河川の存在を確認し、県道または市道を通り過ぎたり、戻ったりして、河川を見つけ出すことが度々であった。

「日方江橋」の場合も、サイクリングロードから旧北陸街道に戻って「村川」と「日方江橋」を確認せざるを得なかった。

農業用水や準用河川が富山湾に流れる河口部は、市街地のように、オープンな構造になっているのを観た記憶はなく、河口の手前、約100mから暗渠構造とし、ボックスカルバートの構造で富山湾に流れている。



欄干に「村川」



村川の欄干に「日方江橋」、「ひかたえはし」、「昭和9年竣工」



左図

「日方江橋」の下流
ここから富山湾へ流入する手前で
暗渠構造となっている。

右図

村川の突堤は、暗渠構造のまま富山湾へ約15m伸びている。またその先にテトラポットで河口部を護っている。



「古志の松原記念碑」

岩瀬町から常願寺川に至る旧北陸街道(約4km)の海岸線は、白砂青松が偲ばれる。

慶長年間(1596~1814年)加賀藩、前田利長が江戸参府の往還として、海浜道に多幹性の黒松を植樹し、越中舞子と称していた、と言う。



左図

昭和7年、帝国美術院長 正木直彦先生が当地を訪ね、松原の美しい風光を激賞され、「古志の松原」と名づけら、先生に題字をお願いして建設された、と記してある。



右図

岩瀬運河河口の岩瀬入船町に異国情緒で、あか抜けした「天下堂」がある。洋装店であるが、2階がカフェになっている(下図)。



「天下堂」のカフェ

暫し、コーヒーを飲みながら、重松店主と歓談する機会を得た。

店主からは「私が揃え扱う品々を、一瞬たりとも「消費物」と思っていない。」

その品をお使いになるお客様を、一瞬たりとも「消費者」と思ったこともありません。」の言葉が印象に残っている。

時間をかけた「良き品物」を身に着けていただきたい、という「商い」の強い思いを伺い知ることができた。

岩瀬諏訪神社

「岩瀬諏訪神社」は、春の大祭(5/17~18)、「喧嘩山祭り」で有名である。
全部で14基の「たてもの」という装飾を施した山車が1対1でぶつかる姿は、勇壮である。
重量物のぶつかり合いなので、安全第一で開催されている、と聞く。

「岩瀬諏訪神社」



本殿



岩瀬運河の「大漁橋」 たいりょうはし

「岩瀬運河」は、1940年(昭和15年)に構築され、富山市北部の企業進出(現在の太平洋ランダム、三菱ケミカルなど)に貢献した。

現在、運河沿いに遊歩道が整備され、親子で釣りを楽しんでいる姿もあり、また富岩運河水上ラインの観光船も行き来している。

子供の頃、岩瀬の海水浴場に行くとき、必ず、バスで渡る橋が「岩瀬橋」であり、今は、その上流に富山ライトレール専用橋、更に上流に新しい競輪場橋が輝いて見える。

これらの橋の最下流に掛かっているのが下図の「大漁橋」である。
(河口から約200m)。



「大漁橋」=歩行者専用橋



「岩瀬運河」河口から見る「大漁橋」



左図

「大漁橋」から神通川の河口を望む。

右図

「大漁橋」から上流を望む



「大漁橋」は、岩瀬荻浦町などの旧市街地と岩瀬諏訪町を往来する歩行者用の「専用橋」であり、上流の「岩瀬橋」よりも利用者数が多いように見える。

岩瀬町と言えば、北前船廻船問屋森家(国重文)と馬場家を中心とした街並みの整備が進んでおり、今も観光客で賑わっている。

「富山港展望台」

館内のパンフレットによると、

「富山港展望台」は、昭和 60 年 11 月、富山港の港湾環境整備事業(緑地)の一環として整備された、とある。

晴れた日には、展望台から岩瀬の赤・白灯台、中古車がロシア船に積み込まれる作業が観察できる(入場無料)。

ここで、何より嬉しかったのは、子供にやさしい「トイレ」である。
大人用二つ、左に子供用一つがあり、ほのぼのとさせる。(下図)



子供用トイレ

左図

「富山港展望台」全景

展望台の形状は、「常夜灯」をモデルにしている。

北前船の時代、活況を呈していた東岩瀬港(富山港)の歴史的文化的文化財であり、船方衆の尊敬を集めていた金刀比羅神社(琴平神社)の境内に建っている。

富山港の岸壁は、全部で1～10号岸壁とドルフィンが4ヶ所、更に沖合には28万トン級タンカーが係留できるシーバースがある。

- ・展望台の高さ 24.85 メートル
- ・展望室床面積 72.80 平方メートル

富岩運河の河口は、富山港である。
その南側に銭湯「萩の湯温泉」があり、富山港を背にしている。

準備中の主人に聞くと、赤い鉄分の湯で、非常に身体が温まり、遠方からも入場される、との事。

燃料は廃油と聞く。





北前船の廻船問屋「森家」

「森家」には、観光案内役として、10回くらい来た。

受付と顔見知りになり、私の料金は無料にしてもらった事もあった。

「北前船」が、富山にもたらした経済・文化は、誠に大きい。

案内の男性が、「北前船」の別名を「バイセン」と言い、寄港する毎に、「2倍・2倍」と儲かった、と嬉しそうに案内されていた。

金刀比羅神社(ことひらじんじゃ)

「金刀比羅神社」(岩瀬荒木町)は、神通川河口の常夜灯と共に鎮座している。創建は、江戸時代後期の文政3年(1820年)で、当時は神仏習合で栄えていた讃州(現・香川県)の象頭山(ぞうずさん)・金毘羅大権現を勧請した、と記してある。



琴平社

右図

金刀毘羅社(琴平神社)の常夜灯

立て看板によると、
文政3年(1820年)に宋徳天皇、素戔嗚尊(スサノオノミコト)を祭神に祀った社で、東岩瀬港の守護神として船方衆の尊敬を集めていた。

常夜灯は、慶応元年(1865年)佐渡伝次郎によって建てられ、高さ6mで、燈台の役目を果たしていた、と記してある。



富岩運河の「荻浦小橋」 おぎうらこはし

「荻浦小橋」は、富岩運河の河口橋である。

「富岩運河」は、富山環水公園(富山駅北側の湊入船町)から始まる。

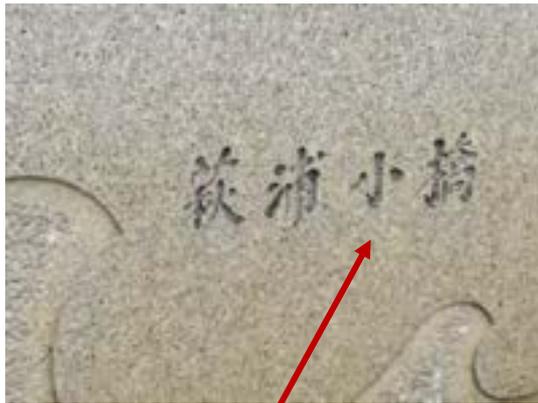
富岩運河は、重要文化財である「中島閘門」を通過し、住宅、工場そして木材などの資材置き場などを横に見て富山港(富山湾)に流れている。

また、富岩運河は、神通川の堤防と共用しているように流れているので、「荻浦小橋」は、神通川の「荻浦橋」のスロープの中に収まっている。

そのため、車で走ると、「荻浦橋」と「荻浦小橋」を認識することは無いであろう。



「荻浦小橋」から河口の富山湾方向を見る



「荻浦小橋」の欄干



竣工年月、平成9年12月

「中島閘門」 (水のエレベーター、重要文化財)

「中島閘門」は、富岩運河の中程にあり、1934(昭和9年)年に完成し、昭和の土木構造物としてし、全国初の国重要文化財(重文)に指定されている。

富山駅の標高が、7.5mもあり、富山湾との高低差が大きいため、富岩運河の中程に「水のエレベーター」を設置する必要があった。

「中島閘門」は、上流と下流にある水門を開閉する「パナマ運河方式」である。

日本で体験できるのは「こだけ」と管理人から聞く。

写真の左側に写っている、建物が操作室で、部屋の真ん中に操作盤が設置され、前方と左右の3面がガラス張りの窓になっている。

その操作盤は、大理石にうるし塗装をしたような重厚な装置であり、昔を偲ぶことができる貴重な遺品である。

その重厚なスイッチ操作盤から、仕事の重責を感じさせ装置であるのに対して、現在の物は、鉄製の小型のスイッチ操作箱となっており、味気ない。

建物は、昔のままであり、24時間勤務であったことから、台所や内風呂などが完備している。



白い船は、「kansui (かんすい)」
(乗客定員 55 名)、
2019 年 3 月に就航。
[全長] 18.0 m、[全幅] 3.3 m。

こうじんはし
いたち川の「興人橋」

「いたち川」は、常願寺川の「常西合口用水」から分流し、富山市郊外の田園地帯～富山市中心部を南北に縦断し、神通川に合流している一級河川である。

なお、神通川との合流地点は、神通川に架る中島大橋(国道8号線の橋)の直前である。

いたち川は、私にとって、自宅から近いので、戦後、「おっしょらい」や「灯籠流し」をした思い出の深い川である。

石倉町の延命地藏とその湧き水、宮本輝の「蛍川」などでも有名-----。

また、友達の坂井さんとロードバイクで出かけるルートは、安全かつ信号の無い神通川の河川敷が多く、自宅から出発して、最初に休憩を取る場所が下図の橋(欄干)、即ち「いたち川」の最下流に架る河口橋である。

「中島大橋」

残念ながら、この橋には名前が付いていない。

それは車道でないからかもしれない。と言うのは、ここから数百メートル上流に車両が通れる相似形の橋が架かっていて、そこには「興人橋」と記載されている---



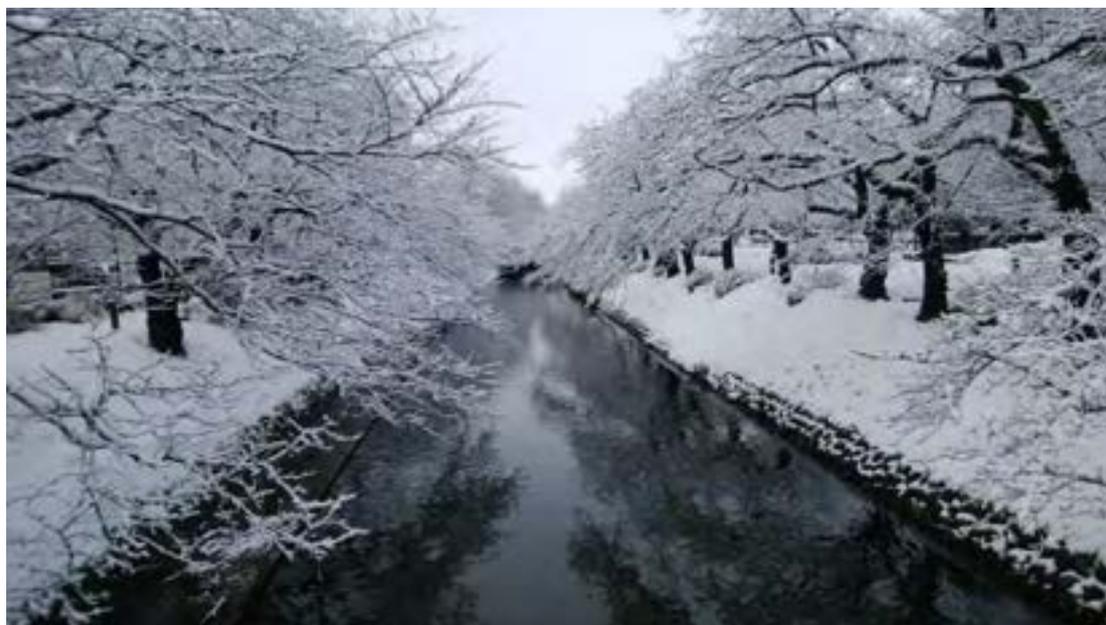
「いたち川」が「神通川」に合流する地点
遠方の赤い橋は、国道8号線の「中島大橋」

下図の標識は、「いたち川」が「神通川」に合流する地点に立っている。



神通川の堤防には、右上図の標識（河口からの距離）が書いてある。
ここは、河口から 3.8km とある。

右図
清掃中の「松川」



「松川」の桜も良いが、純白の冬景色も美しい



左図
神通川右岸堤防にはヘリポートが数か所
ある。
縦横、約 20m 位の敷地である。

いたち川に架る「新四ツ屋橋」
(平成 12 年 7 月竣工)

写真正面が新富山美術館
左側が日赤病院



常
西
用
水
の
佐
々
堤

常西用水の「佐々堤」の立て看板によると、
常願寺川は、氾濫と治水の歴史である。

天正 8 年(1580)集中豪雨のため、大氾濫を起こし、佐々成政は、その惨状を目
のあたりにしました。

成政は、自ら陣頭指揮をとり、大規模な人海作戦により、底辺 40m、高さ 10m、
長さ 150m 余りの堤防を 1 年で築いた、と記してある。

おぎうらばし
神通川の「荻浦橋」

「荻浦橋」は、富山市内を流れる「神通川」(一級河川)の河口橋である。その橋が、県都(富山市)の中にありながら、河口から約 2.2km も上流に架っている。

それは、左岸に富山火力発電所と日本海石油、右岸に新日本海重工と昭和タイタニウムの工場群に挟まれており、両者間で、人・物の往来の必要性が無かったためであろう。

「荻浦橋」は、この日も橋(歩道)に人影は見え、大型のトラックの通行が多く、基幹の産業用道路という役割りである。

ここから河口へ走り、漁師らしき人と歓談していた時、戦前、神通川河口付近に「千原崎の渡し」、「草島の渡し」として、定期船 1、2 艘が兩岸を繋いでいたと聞く。

現在の橋は、1996 年(平成 8 年)竣工と記してある。

当初は、暫定 2 車線であったが、2006 年(平成 18 年)11 月 17 日に、4 車線化された、とあり、意外と新しい橋である。

サイクニストの皆さん、一度「荻浦橋」を歩いて渡ってほしい。

「荻浦橋」の上流を眺めると、富山の市街地と立山連峰、下流はエントツを含む工場群と富山港埠頭という、対照的な風景は、ここの特徴である。



「荻浦橋」の高欄に「神通川」

高欄は、写真(左図)のとおり、北前船の船首と荒波をイメージしたデザインであり、欄干には、約 30m 間隔に北前船の帆をイメージしたモニュメントが置かれている。

「荻浦橋」全体の構図は、北前船をイメージした造作になっている。



高欄「荻浦橋」と神通川
左岸に富山火力発電所



「荻浦橋」の欄干にある北前船の「帆」をイメージしたモニュメント



「荻浦橋」の「水位観測所」



「荻浦橋」の中間地点にある休憩所(萩のデザイン)



神通川の河口(左岸)から見る東岩瀬の赤と白の燈台



「漁業標識柱」

左図の塔は、神通川の河口の真ん中に立っている。

この標識について、ランニング中の人達に尋ねたが、「知らない」との返事なので、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所で教えてもらった。

名称は、「漁業標識柱」または「沖合漁場標識」と呼ばれ、漁場ポイントの基点となる標識、との事。



遠隔操作による自動草刈り機

某日、神通川の堤防を走っていると、遠隔操作による草刈り機が活躍していた。

この草刈り機は、国交省が所有し、施工業者が借りて仕事している、という。草刈りの必要性を尋ねると、背丈以上の雑草を放置したままで、洪水となった時、スムーズに流れず、色々悪さするので、適宜、草刈りをしておく必要がある、と言う。

堤防の急な斜面(約 45 度)の雑草もスムーズに刈って行き、なかなかの勝れものである。

こうえさんが 牛ヶ首用水の「古江三ヶ用水路」

「牛ヶ首用水土地改良区」の事務所は、国道 8 号線沿いに建っており、パンフで丁寧に教えてもらった。(富山市大塚東 32)



「古江三ヶ用水路」

八町、針原、布目の農民たちの願いで、寛永元年(1634年)用水路工事に着手し、10年後には、山田川だけでなく、井田川からも水を取り入れ、完成した。

その後、他の村からも要望が出て、水源として、より豊富な神通川の本流に水源を求めた。

その結果、石高(収穫量)が4万石に達したことから、別名「四万石用水(しまんごくようすい)」とも呼ばれるようになった、と聞く。



「牛ヶ首用水」



「しまんごくはし」

神通川で取り入れた水は、井田川と山田川の下部を横断しているが、その方式は「サイフォン方式」(※)である。

※ サイフォン方式とは、地表に出ている用水の水は、井田川(また山田川)を横断する時、川底に管(大きいパイプ)を敷設しておき、上流から流れてきた水を一旦、川底にもぐらせ、水圧を利用して下流に押し出す原理である。

「牛ヶ首」の名前の由来について

最も困難を極めた「八ヶ山」ルートで、作業員が途方に暮れていたところ、神様から「寝牛の首を取り、難所にうめよ」とのお告げがあり、そのとおり対処したところ、人夫たちが牛の首を見つけ「これは神様の助けだ」という事で、勇気百倍で八ヶ山の難所を無事切り抜けた、と伝えられている。

「古江三ヶ用水路」を通過して、前頁の写真の左側水路は、中沖地区から富山新港へ向かい、中と右側の水路は、射水市東部から富山市八町や布目地区の田圃を潤している。

1654年(承応3年)に完成した水路は、「新江(しんえ)」、以前からの用水路は「古江(こうえ)」と名付けられている、と聞く。



なお、牛ヶ首用水の上流にある7水力発電所(神通第三+薄島+成子+成子第二+五平定+四津屋+下井沢)を合わせた最大出力は、19,500Kwである。

左図
「牛ヶ首神社」
富山市松木=富山市環状線百塚

ふるかわ しんふるかわはし
古川の「新古川橋」

「古川」は、北陸電力(株)富山火力発電所と日本海石油(株)の敷地境を通過して富山湾に流れている、二級河川である。

河口橋の「新古川橋」は、河口から、約1km上流に架っている。



「新古川橋」

なお、下流の富山火力発電所と日本海石油とを横断する橋が、工場敷地内にある。



昭和50年9月竣工



二級河川「古川」、

この周辺は、草島工業団地であり、団地造成のタイミングで建設された橋と思われる。簡単な標識である。



「しんふるかわはし」

「新古川橋」が、河口橋であるか否かを確認するため、四方の八重津浜海岸から海岸線を東方向に走り、古川の河口を探したところ、河口橋のような大きな構造物が出現した。

その橋らしき物というのは、「村川」、「赤田川」で見たのと同じ形の暗渠の導水路であり、古川が富山湾へ流れる突堤であった。

その突堤で作業員が、丁度、休憩中であり、皆さんから、下記の知識を得た。



暗渠の中に堆積した砂を外にかき出して出来た砂山

暗渠になっている理由について、

- ◎ 冬場、季節風の高波により、砂が河口に堆積し、「古川」が富山湾に流れなくなってしまうのを防止するため、海岸線から約 50m 沖合に放水口を設けている、との事。



堆積した砂を排出中の工事現場

- ◎ それでも、暗渠構造の中まで、砂が堆積するため、毎年、その砂を排出する作業を請け負っている、との事。

なお、古川の場合、放水路の中が、3路に区画されており、1本を止めても他の2本で放水できる構造になっている。

なお、コンクリート仕切りの壁には、鋼板が打ち込み易いよう事前に溝が彫られていた。

右図の立て看板には、「突破工」と記してある。



左図は、工事現場から上流を見る。

富山火力発電所の煙突と綺麗に整備された「古川」の堤防



「古川」が富山湾に流れる吐出部(暗渠)

「古川」の突堤は、富山湾の中では最大級である。
長さ約50m、幅約15m、排水口3ヶ所の突破工である。

右図
火力発電所と日本海石油との敷地境
の橋(古川を横断)



古川の西側の海岸は、八重津浜海水浴場である。
小学生の頃、よく海水浴に来た。
当日、カフェ風の浜茶屋が開店準備の作業中であつたが、数軒しか見えなく、
昔に比して淋しい感じがした。



四方東野割町の田畑を潤す農業用水



突堤は絶好の釣り場



「恵比須神社」
(とやま市漁港四方本所(四方漁港)前)



「とやま市漁業協同組合」



四方本所の船泊

しんめいかわ わごう うらはし よかたしんはし
神明川の「和合の浦橋」と「四方新橋」

神明川(準用河川)の名前の由来は、四方神明町の地名からであろう。

河口橋は、越中浜往来に架る「和合の浦橋」であり、その約 50m 上流に「四方新橋」が架かっている。



「和合の浦橋」から上流を見る



「和合の浦橋」の欄干、「神明川」、「和合の浦橋」、「昭和46年3月竣工」



「四方新橋」の欄干、「四方新橋」、「よかたしんはし」、「昭和30年3月竣工」

昭和36年(1961年)入社した頃、呉羽町、小杉町、大門町の旧町部は、一つの塊のように人家が密集し、各町部間は、水田風景であった。

特に、旧8号線から北側の射水平野は、一面の水田であり、秋には、刈り取られた稲が「ハサ」に掛けた天気干しの風景であった。

また、水路に小舟があり、稲の運搬に活用されていた。

フナ釣りに出かけた思い出もある。

しもすかわ

うちいではし

下須川(四方放水路)の「打出橋」

夕日に映えた「浜街道」(次頁写真)の両サイドに「打出橋」の欄干が見える。欄干には「下須川」とあるが、住宅地図では「四方放水路」とある、準用河川である。道路が赤茶色となっているのは、消雪水の鉄分の影響だろう。



「打出橋」の欄干



「下須川」



「打出橋」



「うちいではし」



下須川は、富山湾に注ぐ手前、約 100m から暗渠になっている



下須川の突堤部は絶好の釣り場らしい

「貴船神社」

「打出橋」から富山新港(堀岡)方向へ約 100m のところに「貴船神社」がある。

「船」を「貴ぶ」と言う名前からして、当然、漁業の安全を祈願している、と思ったが、「万物の命の源である水の神を祀り」とあり、豊作を願って「雨」を呼び込む祭礼が春に行われる、と記してある。



貴船神社の本殿



浜街道に面した「貴船神社」



左図
神社名「貴船神社」

山伏川の橋

山伏川は、富山市の最も射水市寄りの農業用水であり、河口近くには、周辺の汚水処理する施設も完備している。

「下須川」、「山伏川」とも、射水平野の中の放水路であり、下図の写真のように、立派な護岸と直線化工事の姿が観られる。およそ年次的、計画的に整備されて来たのであろう。

なお、これら用水路に架る橋には、「河川名」、「橋名」および「竣工年月」などの標識は無かった。



整備された山伏川



浜街道と富山湾の間にある公園

打出浜の花嫁

下図の石碑は、一般国道 415 号線（浜街道）の富山市と射水市の境（富山市寄り）にある。

説明看板によると、

その昔(平安～鎌倉時代ころ)、打出の浜に船泊があり、宿もあり、白拍子(昔の遊女)も居たという。

その中に「花」という、頭が良く、琴や舞や和歌に優れ、心の優しい美女がいた。

ところが、不治の病に罹り、26 歳の若さで亡くなったため、旅の人々は悲しみ、皆で弔った、と記してある。



「打出浜の花嫁」碑

「勘兵衛はうす」 --- 国登録有形文化財

「勘兵衛はうす」とは、平成 29 年 10 月 27 日、登録有形文化財(建築物)に登録された、旧田中家住宅の主屋のことである。

立て看板によると、

旧田中家は、江戸時代から漁業を営み、網元であった。

江戸時代に北海道との交流を始め、漆器類の商いや金融業などで財を成した。



右図は、立て看板

当主は、代々、勘兵衛と名乗っており、明治16年に主屋、20年に土蔵が建てたが、大正5年に主屋が焼失したため、翌年に再建された、と記してある。

右図

主屋の正面は、二階建て入母屋造りの堂々たる佇まいである。

ところが、主屋を背後ろから眺めると、下図のとおり、三階建てに見える意匠が面白い。



正面玄関



左図

主屋の後ろからみる

あしあらいかた

足洗瀉公園

新湊方面へサイクリングに出かけた時は、この「足洗瀉公園」までノンストップで走り、ここで一服するのが通例である。



足洗瀉公園と池



公園の西側にある吊り橋

立て看板によると、
その昔、浜街道は、北陸道として、多くの人が往来していた。
地名の云われは、承元元年(1207年)、親鸞聖人が配流の途中で足を洗った時、
繁茂していた芦の原、この「アシハラ」がなまって足洗瀉の地名になった、と記してある。

富山県新湊マリーナ

海老江海浜公園の隣に、富山県新湊マリーナがある。
当日、少し強めの風が吹き、ヨットマンがセーリングを楽しんでいた(下図)。



新湊マリーナ

防波堤の先端に、可愛らしい
標識灯があった(下図)。



高さ 5~6m の標識



当日の波浪



左図
防波堤標識灯からみる
富山新港火力発電所

下図
「海竜マリンパーク」
では、家族連れが釣りを
楽しんでいた。

コロナ禍以降、釣り人気が高まり、特に、漁港での魅力が広まってきた。また夜間開放する動きもあり、地域外からのレジャー客の呼び込みにもなっている、という。

「釣り禁止」の看板があるので――、注意してください。



家族での釣り場



レストラン Sazan(さざん) フランス料理店



整備されている放水路

海老江海浜公園を横断して富山湾に流れている小川が2本あり、住宅地図では「四間川」(しけんかわ)と記載されているが、河川と言うよりも、農業用の排水路としての役割を担っているようである。

くさおか
草岡神社



草岡神社

[祭神]

主祭神 おおなむちのみこと
大己貴命
(国作りの神・農業神)

副祭神 たまよりひめ
玉依姫命
(水の神・聖母神)

副祭神 ことしろぬしのみこと
事代主命
(海の神・商業神)

立て看板によると、

当神社の祭神は、大己貴命(大国主命)であり、神代の昔から大己貴命が宝剣でこの地を開墾して、人々が生活を始め、当地を草岡の里と名付けた。

江戸時代後期から今日まで、地域の人々の守護神として、禍事災難を取り除き、日々の暮らしに、限りない恩恵を与えてくださるものとして、厚い信仰を集めている、と記してある。



草岡神社の屋根——形がよい

堀岡雨水幹線の水辺空間

これは驚いた。

「草岡神社」の入り口に鯉が泳いでいる、と思いきや――。



草岡神社の入口による水辺空間



「水辺空間」の断面図

上図の看板によると、
「水循環・再生下水道モデル事業」において、堀岡地区を浸水から守るため、

「堀岡雨水幹線」を改修する時に、暗渠化し、その上部に「せせらぎ水路」を暗渠の上部に設け、地域の皆さんに親んでもらえるような「水辺空間」を作った、とある。

なお、ここに流れている水は、神通川左岸浄化センター(射水市海竜町 23 番地の 2)の処理水が有効利用されている、との事。

太平 19 年(747 年)4 月 20 日(太陽暦の 6 月 6 日)に、大目(だいさかん・国司の第 4 等官)の秦八千島(はだのやちしま)の館で、税帳使として上京する事になった、大伴家持の送別会を催した時に、家持が詠んだ歌、とある。



看板 草岡神社奉賛会提供

「奈呉の海 沖つ白波 しくしくに 思ほえむかも 立ち別れなば」

(通釈)

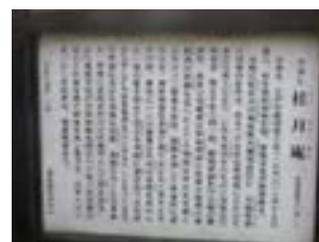
奈呉の海の沖に立つ波のように、しきりに思い出されることでしょう。
旅立ってお別れしてしまったならば――

けいげつあん
八幡宮と挂月庵



左図「八幡宮」

下図 その説明看板



現在の堀岡地区は、北に「パークゴルフ場」、南に「富山新港火力発電所」を有し、工場群と融合した住宅地域となっている。

立て看板「桂月庵」によると、当地区は、万葉集にも詠まれている由緒ある古い農漁村であった。その関係からか、小さな町ながら神社仏閣が多く見られる。



「桂月庵」



村社 猿田彦神社

臨港道路富山新港東西線と新湊大橋

「富山新港」の東側にある「堀岡発着場」、西側に「越の潟発着場」との間を富山県営のフェリーボートが運航している。

立て看板によると、

昭和 42 年 (1967 年)、富山新港造成の時、電車と道路が切断されたため、県営のフェリーで両地域を約 5 分で繋いでいる。



立て看板



フェリーボートの標識

日中でも 1 時間に 2 回、往復している。

サイクニストにとって、自転車を乗せたまま「海王丸パーク」へ行けるので、非常に便利である。船上から廻りを眺めている間に対岸へ運んでくれる貴重なフェリーである。運賃は無料。10 回位利用している。

戦後、「シジミ貝」売りのオジサンが自転車に乗り、ラッパを吹いて廻って来た時、母から「自転車止めて!!」と言われて、追っかけたものである。

ここの「越の潟」で採れた「シジミ貝」であろう。

また、小学生の頃は、富山西町～高岡駅前までの間に、直通のボギー電車が走っていた。

下図は、富山新港に架る日本海側の最大の斜張橋であり、富山新港に寄港する貨物船などが通り抜ける「新湊大橋」である。



「新湊大橋」――堀岡地区の橋脚から

説明看板によると、

- しゃちょうきょう
- ・斜張橋 ――橋の形の一つで、塔から斜めに張ったケーブルで構築
- ・車道の下に歩行者(自転車も可)専用道路の2階建て構造
- ・全長――3.6km(東西のアプローチ部を含めて)
- ・歩行者専用道路の長さ―――600m
(「あいの風プロムナード」と呼び、主塔にはエレベーターがある)
- ・海面から橋桁までの高さ―――47m



エレベーターのある主塔

中野木材整理場水路の「中野橋」

富山新港の形は、おおよそ長方形である(約、東西=3.5km、南北=1.0km)。



「中野橋」は、富山新港東側の中野木材水面整理場に架っている橋である。

道路は415号線で、富山湾(北方向)へ走ると「新湊大橋」に辿り着く。

左図

「富山新港周辺案内図」



「中野橋」から富山新港を望む



「中野橋」の欄干
昭和46年4月竣工

東部主管排水路の「七美新橋」

東部主幹排水路の河口橋は、「七美新橋」である。

その上流に「柳瀬新橋」が架かっている。

欄干の表示は、下図のとおり。



欄干に「七美新橋」



欄干に「七美新橋」



「七美新橋」の下流

上図の左の煙突は、富山新港火力発電所。その手前に「スズキマリーナ」、その右側に農林水産省の「射水郷東部排水機場」。



「射水郷東部排水機場」

「新湊弁財天」

下図は、富山新港の南水路の緑地公園に建つ「新湊弁財天」である。



立て看板によると、
富山新港は、その昔「放生津潟」（ほうじょうづかた）と呼ばれる干潟であった。

放生津潟では、しばしば船が転覆し、命を失う人が続出した。

「これは、潟に棲むガメの祟りだ」ということで、明和4年(1767年)に島を

作り、ガメを海竜大明神として祀った。

その後、弁財天も合祀され、明治に入って、なぜか浦島太郎まで祀られるようになり、ワダツミが祀られることになり、社号も「少童社」に改称された。

昭和42年(1967年)、富山新港造成工事のため弁天島は、姿を消したが、少童社が片口地区へ遷座し、神明社と合祀された。

その後、社殿は老朽化し、昭和61年(1986年)、富山新港に出入りする船の航海安全を願い、社殿に代わって「新湊弁財天」が、富山新港近くに造成され、港の見える緑地帯に建立された。

放生津潟にあった弁天島の少童社の祭神を胎内神として納め、平和と港の守護の願いを込めて建立された、と記してある。

弁天様のお身体は、アルミニウム製。



「富山新港展望台」からの「新湊大橋」

丁度、この時、「富山新港」の火力発電所(東側)から中型のタンカーが現れた。富山新港火力発電所(写真の右側)から、タグボートで富山新港の真ん中に引き出された(下図)。タンカーの向きは、南東である。



- ① タンカーの前後に2隻のタグボートが操船している。
左側のタグボートは、タンカーを引っ張っている。
右側のタグボートは、押している。



- ② ガリバー(タンカー)と小人(タグボート)という感じであり、認識できる動きではないが、徐々に、船首が北向き(富山湾)になって行く。

③ タンカーが「新湊大橋」と直角にし、「新湊大橋」の中央を通り抜けられるように調整する。



④ タンカーは、タグボートに牽引され、新湊大橋を通り抜けていく。



「富山新港展望台」

富山新港展望台は、「新港弁財天」と並んでいる。

当日、家族連れの釣り客で賑わっていた。

この展望台は、1980年(昭和55年)に建設され、高さは19.5m、富山新港が一望できるのは勿論だが、展望台の最上階までには、53段の階段を昇る必要があり、その途中に富山新港の歴史写真などが展示されているので、適宜一服できるのだが、壁面には、「ファイト」とか「もう少しで到着」等、元気づける表示が壁面に付いていたのには笑った。

私が小学生のころ、学校から帰宅する乗車駅は、「富山北口駅」であり、その手前が「八ヶ山駅」であった。

「八ヶ山駅」を出発する電車のクラクションを教室で聞いてから、「富山北口駅」まで走り出してもその電車に間に合った。

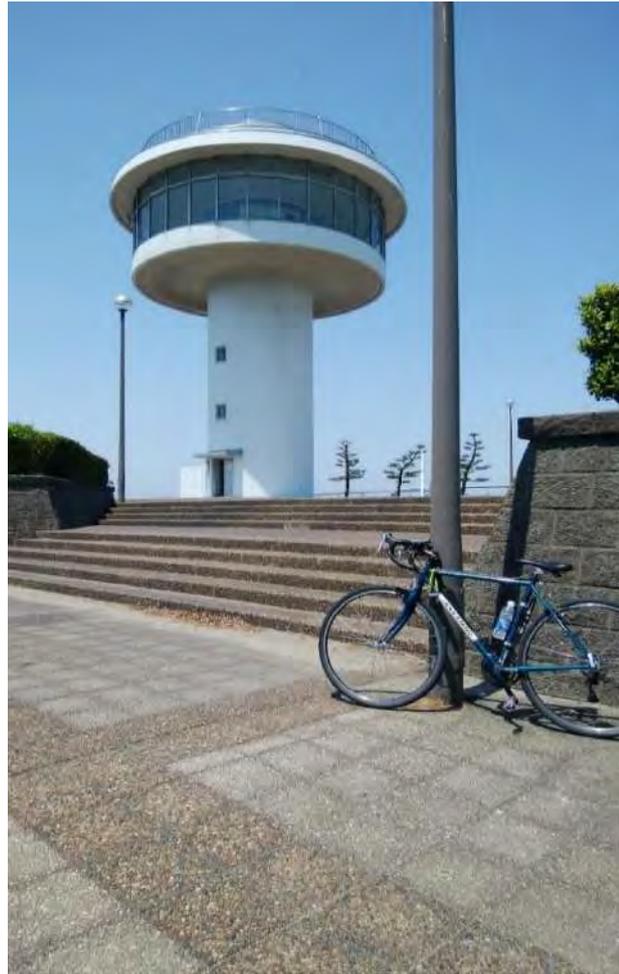
それは、北陸本線との立体交差を上るのに、時間を要していたためであり、懐かしい思い出である。

今は廃線となったが、その名残は見られる。

また、夏休みになれば、八重津浜海水浴場へ出かけた。



「あと53段」
「富山新港展望台」内の階段



「富山新港展望台」の外観

しんほりかわ しもくぐえはし
新堀川の「下久々江橋」

新堀川は、富山新港(東水路)に流れている二級河川であり、その河口橋を「下久々江橋」と言う。

新堀川は、「東部主幹排水路」と並行して流れており、又、両河川の堤防は、全く相似形であるので、欄干に表示が無ければ、水路と河川の区別がつかない。

なお、「下久々江橋」の上流、約800mの所で「新鍛冶川」が「新堀川」に合流している。



「下久々江橋」

その昔、釣り場であったところが、現在、富山新港、その背後一面が穀倉地帯に変貌し、土木事業による発展に感歎するばかりである。

更に、射水市の東側の足洗潟の本郷から、庄川河口までの間に排水機場が多く、排水路が完備している風景を見て、その技術と変貌に隔世の感を禁じ得ない。

げじょう しょうどう 下条川の「小童橋」

下条川(二級河川)の源流は、婦中町であり、その昔は、越の潟または伏木への交通路として活用され、小杉町から富山湾側一帯は、「ハサ」の残る田園風景であった。

ところが、今の小杉町の下条川には、桜ソメイヨシノが植樹され、憩いの場所となって、富山新港に流れている。



「下条川」の河口橋に架る川幅約 30m の「小童橋」

「小童橋」から富山新港を望むと「新湊大橋」が、その右側に「富山新港展望台」が小さく見える。

今から 60 年も前の射水平野の景色は、7~8m の小船が「越の潟」、「庄川河口」まで米を運搬していたが、今や、下条川(下図)は、大運河のような堂々たる水路に変貌している。



「少童橋」の上流-----運河の様相



欄干に「小童橋」



「しょうどうはし」



「少童橋」の上流にある「下条川」(左)、「片口橋」(右)の欄干



かたぐち

西部幹線排水路の「石丸橋」^{いしまる}

西部幹線排水路の河口橋は、「石丸橋」で、昭和42年8月竣工とある。
排水路の川幅は、約20mであるが、勾配が無いので、水は滞留しているように見える。

庄川右岸の農業用水を富山湾へ放流するため「新港の森」の横に「射水西部排水機場」が稼働している。

富山新港の周辺には、

- ・「射水東部」、
- ・「射水中央」
- ・「射水西部」

の大型の排水機場が3か所もあり、射水平野の河川または農業用水が逆流しないようにコントロールされている。



「西部幹線排水路」の欄干

例えば、「射水東部排水機場」は、新堀川の富山寄りの田畑を潤して来た、牛ヶ首用水の排水を担当しており、その能力は、最大排水量33.0立方メートル/秒とある。

この能力をドラム缶(200リットル)に換算してみると、1秒間に160本も排出できるパワーを持っており、想像以上に大きな馬力にびっくり——。

フル能力を発揮するのは、梅雨時などの大雨が降った時と言う。

平日は、6台のポンプの内、1台が常時運転している、と「排水機場」(はいすいきば)で教えてもらった。

用水は、滞留しているように見えるが、実はゆっくりと流れているのである。



「石丸橋」の下流にある「排水機場」

排水機場は、365日、24時間、絶え間なく働き続けている巨大排水ポンプであり、常時監視されている。

射水平野の農業水利事業は、昭和 38 年に着工、完成するまでに 14 年を要した、という。

小杉町周辺の田畑の交通は、小舟が担い手であった時代を考えると、その後の高度成長期のタイミングで田畑の乾田化と新港の工業化がなされ、今日のような美田と工業団地が誕生したことに感無量である。



「石丸橋」の上流=「西部幹線排水路」は綺麗に整備された人工美

富山新港に架る「新港大橋」

「新港大橋」は、射水市八幡町と高岡市石丸を結ぶ大橋である。

「新湊大橋」は、射水市の堀岡と海王丸パークを結ぶ大橋である。

両者「港」と「湊」の違いだけで紛らわしい。

「海王丸パーク」へのアクセス道路として、乗用車と共に大型車両の交通も多い。



石丸公園から眺める「新港大橋」

下図は、「新港大橋」の高欄だが、少し趣を異にしている。

これまでのものは、橋梁が敷設されている地域に由来する歴史的事跡をデザイン化した形が多かったが、「新港大橋」は、先ず、地球儀が乗っている事、と「✓」印のデザインの意味は、遠くへ飛んで行くサインではないかと——。富山新港の役割として、世界に羽ばたく港をモチーフしたものと思われる。



「富山新港」



対岸が日本高周波鋼業(株)
「平成2年3月竣工」

右図
「新港大橋」の登り口
左側は「石丸公園」



「姫野橋」

「姫野橋」は、「新港大橋」と並行して設置された散歩道であり、高岡市石丸から射水市内川へ向かう歩道橋である。



帆船「海王丸」 -----海王丸パークにて

内川の橋物語

「内川」は、旧新湊市内を海側(北)と山側(南)に分断するように流れている、二級河川である。

富山湾の海岸線と並行して、新湊の放生津潟から小矢部川の方に流れていたと言うが、現在の「内川」は、「庄川」を境にして、その右岸(東)を「放生津内川」、左岸(西)を「六度寺内川」と呼ばれている。更に、「放生津内川」は、「東内川」と「西内川」と言われている。

「東内川」の富山新港側から「庄川」に向かって、「二の丸橋」、「放生津橋」、「東橋」、「山王橋」、「神楽橋」、「中の橋」、「新西橋」、「湊橋」の8つの橋が並んでいる。

一方、「西内川」には、「藤見橋」、「茂八橋」、「桜橋」があり、両者合わせて、約2,000mの間に11の橋、平均して180m間隔に架橋されている計算になる。

それぞれの橋の名前は、地域に密着しており、特に、欄干には、その街に由来する芸術作品が配置されており、楽しく散策させてくれる。

その斬新なデザインを見て回ると、漁師町と言うよりも芸術・文化の街と言っても過言ではない。

パンフの言葉を借りれば、川べりには民家が立ち並び、川の両岸には小型の漁船がっらなって繫留されている風景は、「日本のベニス」と記されていたが、現地に行って納得できた。

以下、東から西に向かって順に橋の芸術を紹介する。

にのまるはし
「二の丸橋」

欄干の四隅にある欄柱4本には、放生津小学校の児童が、放生津城の二の丸をイメージしたデザイン、と記してある。



欄柱に「内川」



「二の丸橋」



左図

「二の丸橋」から新湊中学校を見る

右図

内川沿いには排水ポンプの電源施設が数か所ある。



ほうじょうづはし
「放生津橋」

「放生津橋」の欄柱には、足利義材(よしき)の像がある(下図)。



台座の説明によると、

室町幕府 第10代 足利義材(よしき) (1466～1521年)が1493年から約5か年間、新湊市放生津において、越中公方(くほう)足利義材の政権が樹立されていた。

その背景は、応仁の乱の対立関係が続いていた1493年(明応2年)、畠山義就(よしなり)の子、基家(もといえ)を討伐するため出陣するが、途中、身内のクーデターにより、義材は龍安寺に幽閉された。

その時、6月28日深夜、暴風雨のなか、義材は脱出し、11日目に新湊の放生津の神保長誠(ながもと)の許に無事御座された。

その後、放生津には、都の公家、武将、僧侶、歌人などが、足しげく往来し、放生津は、政治、文化の中心地として華やかに栄えた。

その後、1508年、上洛を果たし、1521年(大永元年)、將軍職を退き、58歳で没す、と記してある。

第10代將軍は、足利義植(よしたね)と紹介されている資料もあるが、初名は義材である。しばらくの間、放生津に將軍(幕府)があった事には、間違いない。



「ほうじょうづはし」



「うちかわ」



欄干に足利義材の戦いの図



「放生津橋」から富山新港方向

あずまはし
「東橋」

「東橋」は、テレビに時々写される名物橋で、内川のシンボルである。
それは、全国的にも珍しい「屋根付き歩行者専用」の橋で、夜になると橋の両端の休憩所に明かりが灯り、大きな提灯が浮かんだように見える、と言う。
現地を訪ねた日は、残念ながら、耐震工事中であり、全貌を見ることはできなかった。



工事中の東橋

さんのうはし
「山王橋」

「山王橋」は、下図のとおり、欄干の四隅に人間の手の彫刻があり、通称「手の橋」と呼ばれている。

これは、郷土の彫刻家、大学の教授である竹田光幸(たけだ みつゆき)氏の作、とある。

この彫刻は、大理石で創られており、それぞれの台座に「人」、「心」、「愛」、「夢」の表題が付いている。



山王橋 (手の橋)

作者の意図は分からないが、人間の営みにあって、「明るい未来を築こう」という願いが込められているように思えた。



「人」



「心」



「愛」



「夢」

かぐらはし
「神楽橋」

「神楽橋」は、別名、「ステンドグラスの橋」または「虹の橋」と言われている。

欄干には72枚のステンドグラスが、はめ込まれている。

作者は、地元の工芸作家、大伴二三弥(おおともふみや)氏で、カモメ、曳山、各種のサカナと花などが描かれている。

朝日と夕日により、ステンドグラスは、幻想的な雰囲気を漂わせてくれる、とある。



「神楽橋」



「かぐらばし」



「神楽橋」



左図

「手づくり郷土賞」受賞

昭和61年7月 建設大臣 江藤隆美



太鼓橋の「神楽橋」からの内川



「川の駅新湊」



「川の駅新湊」前の「観光遊覧船」



「川の駅新湊」の二階カフェ(一服)



「神楽橋」、「内川」の両岸は、車も通れる道路が続いている

なかしんばし
「中新橋」

「中新橋」は、木造の歩行者専用の橋である。

その昔、北前船が新湊-----正確は放生津かも知れない-----に寄港した時の風景を彷彿とさせる雰囲気を持った橋である。

また、内川の両岸に漁船が係留しており、静かな日中にその周辺を散策していると、タイムスリップさせてくれる。

内川の北側が「中町」、南側が「新町」を繋ぐ橋であることから、それぞれの頭文字をとって、「中新橋」と名づけられた。



柔らかい木の香りのする「中新橋」



「中新橋」は、「平成 21 年 6 月竣工」



「なかしんぼし」

下図の番屋は、映画「人生の約束」のロケ地。
漁師たちの休憩場所であり、作業所でもあった。
板べいの大きな建物は、内川沿いの中でも存在感がある。



「番屋カフェ」の入口

二階のカフェからの眺めは、「内川」沿いに、れんたんする木造の旧家と岸辺に係留している小舟とが、この街の生活の匂いを醸し出しており、落ち着いた、静かな佇まいに時間の経つのを忘れさせてくれた。

なか はし
「中の橋」



「中の橋」の竣工年月=平成17年3月

欄干の表示「なかのはし」

欄干に掛かっている言葉



かたよらない
心
心 天まで
とどけ

元氣
元氣
つづけることの辛さ
楽しさ



さいかんじ
西還寺 (浄土真宗大谷派)

立て看板によると
西還寺は、敦賀氣比神宮の末社で、鎌倉時代に布や桶などを献納した記録があり、昭和3年、古新町の住吉社を合祀した。
なお、狛犬は、松材の寄木造で、台座を含めた高さは、「阿形」が82cm、
うんぎょう
「吽形」が76cmと記してある。



「氣比住吉神社の木造狛犬」

しんにしはし
「新西橋」

「新西橋」には、下図のモニュメントが設置されている。

作者は、金属造形作家
蓮田修吾郎(はすだ しゅ
うごろう)氏 (文化勲章受
章者)である。

コンクリート造りの橋
に茶色の金属作品が乗
り、内川に掛かる橋のデ
ザインとしては、現代的
である。

欄干に聳える金属製の
柱が上部で結ばれてい
る造形の美は、何を言わ
んとしているのかは、私に
は理解不能。



「新西橋」の欄干

左図

「新西橋」の本町
側から放生津方向を
望む。

幅 10m の大きな橋
である。
平成 5 年 3 月竣工。



平成5年3月竣工



「新西橋」

みなとはし
内川の「湊橋」

「湊橋」は、内川の岸辺に係留されている多くの漁船が、富山湾へ出航する時、必ず通り抜ける橋であり、最も大きく、内川の河口橋と言える。



「湊橋」を「東内川」から見る。右側が富山湾、正面左奥が「庄川」方向

下図は、「湊橋」の左岸にある地藏さん。

立て看板によると、
その昔、住吉、放生津
は、小島であり、「渡船」
によって往来していた。

文政4年(1821年)3月
18日の大火で、48名の焼
死者が出た。

橋が無かったために起き
た悲劇であり、このことか
ら、藩は、この年の9月に
長さ55m、幅2.9mの板橋
を架けた。

世間では、これを「お助
け橋」と言っていたが、明
治28年(1895)「湊橋」と改称された、と記してある。



「湊橋」の欄干、「内川」と「みなとはし」。昭和52年7月竣工

なご うらおおはし
「奈呉の浦大橋」

「奈呉の浦大橋」は、「湊橋」の富山湾側に、平成5年5月に架けられた新しい橋である。

形から言えば、内川の河口橋という位置にあるが、新湊市の西漁港と東漁港を結ぶ幹線道路である。



「湊橋」から「奈呉の浦大橋」を見る。正面は富山湾



「奈呉の浦大橋」の歩道

欄柱

「奈呉の浦大橋」と表示した欄干は、上図のとおり「波」をイメージしており、更に「曳山」と「万葉集」のご当地ソングのパネルが張られている。

橋の中程にあるバルコニーからは、東に「立山連峰」、西に「二上山」、そして南には新湊の川辺に佇む生活風景が眺望できる。

歩道は、奇麗なモザイク模様である。

「日本のベニス」を俯瞰できる場所とも言える。



「奈呉の浦大橋」から「湊橋」と新湊市内を見る



「奈呉の浦大橋」バルコニーの「パネル2枚」

	左：[万葉集 第 4150 番]	右：[万葉集 第 4018 番]
パネル	<p>あさとこ はる いみずかわ 朝 床に聞けば遙けし射水川</p> <p>あさこ うた ふなびと 朝 漕ぎしつつ唄ふ舟人</p>	<p>みなとかぜさむ ふ なご え 港 風 寒く吹くらし奈呉の江に</p> <p>つまよ かわ つるさわ な 妻呼び交し鶴多に鳴く</p>
訳	<p>朝、床にいて聞こえるのは、遙か射水川を遡った所を漕ぎながら唄う舟人の声。</p>	<p>河口に寒々と風が吹いているようだ。奈呉（なご）の入り江に妻を呼び交わし、多くの鶴が鳴いている。</p>

「奈呉の浦大橋」から、二上山を眺望し、上の和歌を「鑑賞していると、万葉の詩歌の世界に吸い込まれて行き、穏やかな奈良時代を想起させてくれる。

にしはし
「西橋」

「西橋」は、「中の橋」と「山王橋」と共に、1650年にかけてられた橋で、内川にかかる橋の中でも、350年の歴史をもつ古い橋、と記してある。

その中で最も西側にあったことから「西橋」と言われている。



「西橋」全景



欄干には、「西橋」



「昭和33年2月竣工」



左図は、「西橋」と「藤見橋」
の間にある橋だが、橋の名前は
無かった。
休憩所らしい。

ふじみばし
「藤見橋」

「藤見橋」は、欄干に新湊の曳山の車輪がデザインされ、欄柱には、曳山の上部に飾られる豪華な装飾が乗せられている。



「藤見橋」の全景。
欄柱に4種類の彫刻



欄柱の上部には、曳山の「蝶」や「鈷鈴」^{これい}などをモニュメントにした灯籠が載っている。



「ふじみばし」



「平成 19 年 10 月 竣工」

もはちはし
「茂八橋」

「茂八橋」は、平成 23 年 9 月 竣工の新しい橋で、対岸を結ぶ生活上必要な橋と思われる。



「茂八橋」



欄干に「内川」



「もはちばし」

さくらばし
「桜橋」

「桜橋」は、平成 25 年 4 月竣工の新しい橋であり、「放生津内川」に掛かる橋の内、「庄川」に最も近い橋である。

「茂八橋」と同じ設計のように見える。

違うのは、欄干に「白エビ」や「ズワイガニ」の説明が付いている事。

「桜橋」





欄干には、「さくらはし」、



「内川」



「平成25年4月竣工」



「白エビ」



「ズワイガニ」

「内川」の排水

「内川」の流れの方向と水質について、少し気になったので、国土交通省の大門出張所に尋ねた。

「内川」の水が富山湾に流れそうな出口は、「富山新港口」、「湊橋河口」そして「庄川」の3か所のみである。

しかし、「富山新港口」と「湊橋河口」の2か所は、富山湾に面しているのので、常に、同一の水位であり、勾配が出来ないので、流入・出は生じない筈である。



「内川樋管」(ポンプ場)



「庄川」から「内川」へ送水される水路

とすれば、「庄川」の水位が富山湾の水位より高くなる時だけ、「庄川」から流入し「湊橋河口」へ流れるのだろう、と考えた。

そのタイミングは、満潮～干潮の時だけであり、落差も小さいので、水質に支障が出るのでないかと思い、また上図のポンプは、いかなる場合に稼働するのかについて、尋ねた。

その答えは、「内川樋管」は、「内川」の水質を浄化するため、庄川の右岸にポンプ場を施設し、毎日(日中のみ)、庄川の水を内川へ送水している、との返答であった。

なるほど、了解—。

「内川橋」

射水市六渡寺町の内川は、その昔、射水市(新湊)の内川と繋がった河川であったが、庄川が小矢部川の支流から独立して直線化をしたときに、内川は、庄川の東側に放生津町、西側に六渡寺町に二分された。

六渡寺町は、高岡市の行政エリアかと思っていたが、今もなお、射水市の行政エリアとなっていた。



六渡寺町の内川と「内川橋」



左図の反対側

射水市六渡寺町は、昔の漁師町として、また、交流の拠点として栄えた面影を残しており、今も、静かで落ち着いた家並みである。

町内には、神社仏閣が多く見られ、富山市のような戦災にあっていないので昭和時代の佇まいのように思われた。



「勝誓寺」(浄土真宗本願寺派)

かこのうらはし

「鹿子浦橋」

六渡寺の内川には、前述の「内川橋」と「鹿子浦橋」が架かっている。
この「鹿子浦橋」の欄干には、下図の獅子舞の彫刻が載っている。
六渡寺は、その昔、「射水川」の河口にあつて、大変栄えた港町であった、と言う。

「義経記」には、「如意の渡し」（または「六渡寺の渡し」）とあり、大伴家持の中には「鹿子の浦」と記されている。

毎年、5月15日の祭礼では、富山の有名な「獅子舞」として、その伝統が引き繋がられている。

富山県内の橋の中で最もユニークな格好をしている欄柱であろう。



左右とも「鹿子浦橋」の獅子舞



海上保安庁巡視船「のりくら」（伏木港）



電線の無い電柱にツタが繁茂し、電柱の姿を残しているのが面白い。

[余談]

新築された射水市役所に立ち寄り、受付嬢から、河川情報「観光パンフ」などを集めてもらった。



9

新築された射水市役所



「石名橋」



説明看板

説明看板によると、
「石名橋」とは、縦 160cm、横 75cm、厚さ 10cm の石の橋である。
その裏面には、「阿弥陀石名橋(地藏橋)——射水市大島小島如来」と彫られている。
昔、集落移転の際にこの地藏様も一緒に運ぼうとしたが、重くて大変であった。
ところが、村人の枕元に「元のところへ戻りたい」とのお告げがあり、元の所へ
戻す時は、軽々と運べた。
ある朝、この地藏様が橋になっており、「橋になって村人の役に立ちたい」との
お告げがあった。長い間、草島往来に架けられていた、と記してある。

庄川の「新庄川橋」

「庄川」は、岐阜県の飛騨高地を水源とし、途中に合掌造りで有名な白川郷や五箇山そして砺波平野を経て、高岡市から富山湾に流れる一級河川である。

明治時代の「庄川」は、吉久・二塚の地点で「小矢部川」に合流しており、そこから下流(富山湾まで)を「射水川」と称し、万葉集の伴家持の歌に「いみずかわ」の名前で、数句、詠まれている。

小矢部川との合流地点では、洪水被害が発生したため、1900年(明治33年)から1912年(明治35年)にかけて、現在の射水市川口から、直接、富山湾へ流れるように改修(直線化工事)され、「庄川」は、現在のように富山湾まで独立した河川に変わった。

富山の「常願寺川」が「白岩川」から分流したケースと一緒に生い立ちである。

学校の遠足で「小牧ダム」から船に乗って「大牧温泉」までの行ったのを思い出す。

また、上流の御母衣(みぼろ)ダムは、従来の壁型の重力式ダムではなく、遮水壁が斜めになっている、日本屈指の傾斜土質遮水壁型「ロックフィルダム」であり、電気工学を学んだ者にとって印象深いダム・発電所である。



「庄川」の下流（「新庄川橋」の欄干から）

「新庄川橋」の中程から、川幅いっぱいになっている景色は、砂漠の風紋のように、波長の長い「さざ波」となり、一服の絵画のようであった。

富山県東部の黒部川、片貝川は、水流が強く、川底も見えるのに対して、この庄川(後の「小矢部川」を含めて)は、勾配が小さくて流れが緩やかであり、両者は非常に対照的である。

当日は、少し風があり、庄川の河口は、下図のとおり上流に向かって波立っていた。



庄川右岸の堤防から見る「庄川」の河口

「富山湾岸サイクリングコース」を走って、漁港の入り口の標識塔などを含めて、船舶の航路位置を示す灯台を数多く見て来た。



伏木指向灯

灯台には、何か哀愁とロマンを感じる。

40代頃、石川県輪島の外浦海岸にある「猿山岬灯台」を見学し、航行の安全を願って照らす灯台守と歓談した事を思い出す。

しかし、近年、GPSにより夜中でも安全かつ簡単に航行できるようになり、灯台の役割が大きく様変わりした。

今後は、観光地、また歴史的・技術的な価値として、評価されて行くものと思う。



「庄川」を横断する「万葉線」と「新庄川橋」
(415号線の「庄川本町」の交差点から)



欄干の表示、「新庄川橋」



「しんしょうがわはし」
(昭和41年3月竣工)

ふしきまんようおおはし

小矢部川の「伏木万葉大橋」

小矢部川の源流は、ほぼ富山県内であり、どちらかと言えば小柄な「一級河川」と言える。また、河口付近では、河床の勾配が小さく、流れているというより、富山湾の一部という感じである。

「伏木万葉大橋」は、伏木港へのアクセスを改善するために建設された、橋梁(610m)であり、人が歩ける橋としては、富山県 No.1 である。

なお、この橋(道路)は、「港湾法に基づく臨港道路——」という事であり、一般的に言うところの「国道」、「県道」ではない。



「伏木万葉橋」の全景。

(小矢部川右岸で、六渡寺側から伏木方面を望む)

- ・左岸——高岡市伏木2丁目、・右岸——高岡市吉久1丁目、
- ・橋長——610m(富山県の最長)、・幅員——11.8m



欄干の「伏木万葉大橋」



「ふしきまんようおおはし」



左図
欄干に「小矢部川」

「伏木万葉大橋」の歩道には、バルコニーが4か所あり、それぞれ大伴家持の歌碑がある。



立山に
降り置ける雪を
常夏に
見れども飽かず
神からならし
大伴家持



東風
いたく吹くらし
奈具の海人の
釣する小舟
漕ぎ隠る見ゆ
大伴家持



朝床に
聞けばはるけし
射水河
朝漕ぎしつっ
唱ふ舟人

大伴家持



玉くしげ
二上山に
鳴く鳥の
声の恋しき
時は来にけり
大伴家持



伏木万葉大橋の中程から二上山を望む

「伏木港湾合同庁舎」(下図)は、面白いデザインの建物思ったが、後日、耐震設計で補強されて結果のようである。



「伏木港湾合同庁舎」支局伏木庁舎ビル

受付の案内には

- ・伏木税関支署
- ・検疫所伏木富山出張所
- ・植物防疫所伏木富山支所
- ・海上保安本部伏木海上保安部
- ・入国管理局富山出張所伏木分室
- ・北陸信越運輸局富山運輸

下図は、「伏木港湾合同庁舎」の前庭にある「まあらためしよあとふしきおだいばあと潤改所跡伏木御台場跡」とあり、昔から、この地に港を管理する所があった、との事。

説明によると、

ま
「潤」とは、船着場(港)の事で今の税関と港湾管理所を兼ねた役所であった。

安政6年(1859年)、加賀藩の郡奉行の支配のもとに浦口銭(出入り物資を検査して手数料)の取

さしかみ
立、指神(積荷の証明書)の交付など大きな権限を持っていた。

江戸時代、伏木港に入荷したのは、綿、砂糖、魚肥など、出荷は米であった、と記してある。



まあらためしよあとふしきおだいばあと
「潤改所跡伏木御台場跡」

下図(左)は、伏木万葉埠頭バイオマス発電合同会社の西側から富山湾に注いでいる河口部である。

同じく、右図は、おおよそ二上山からの流れを収集した用水であり、伏木富山港国分第2岸壁の造成時に整備された水路と思われる。

これらの小川には、名前などの記載はなかった。



加古川の橋

下図(左)は、加古川旅館(伏木国分1丁目)の横を流れている「加古川」(準用河川)である。

右図は、加古川旅館の玄関から富山湾を望んだ風景で、写真左上には、テトラポットの奥に、男岩(おいわ)が見える。



「加古川」河口橋から「男岩」を望む

国道 415 号線の雨晴トンネルを越えると「もみじ姫公園」に出る(下図)。



「もみじ姫公園」

「もみじ姫公園」から 415 号線を氷見方面に走ると「展望広場」がある。

そこから眺める富山湾、男岩、立山連峰の一望は、「富山湾八景」と名付けたいところ――。

海岸線をなぞるように走る氷見線とその遠方に見える立山連峰は、是非、立ち止まってほしい景色である。



「富山湾八景」と言いたい展望台から

渋溪(しぶたに)の崎の
荒磯に寄する波
いやしく志久(しく)に
いにしへ思ほゆ

大伴家持

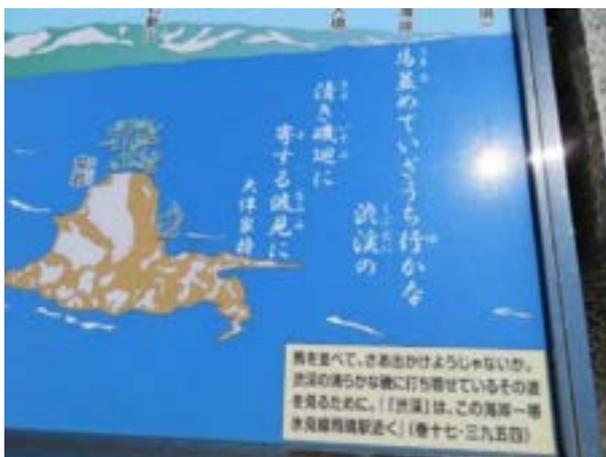


展望広場にある案内板

右図
展望広場から女岩(めいわ)を見る



女岩



展望広場にある案内板

馬並(うまな)めて
いざうち行かな
汐溪(しづたに)の
清き磯廻(いそみ)に
寄する波見に

大伴家持

しんしぶたにはし
渋谷川の「新渋谷橋」

高岡市渋谷地区の「渋谷川」には、下図のような立派な「新渋谷橋」が掛かっている。準用河川である。



国道 415 号線に架る「新渋谷橋」と女岩



「渋谷川」、



「新渋谷橋」

-----昭和 38 年 10 月 竣工-----

雨晴海岸と義経岩

氷見線「雨晴駅」の線路を横断して海岸へ降りて行くと、先ず「義経社」が、更に、階段を下りて右側へ向くと、かの有名な「義経岩」が見える。

当日(5/25)、水曜日であつたが、多くの観光客で賑わっていた。



義経社

二上山の山裾が富山湾に没するこのあたり一帯は、白砂青松と日本海では数少ない遠浅の「雨晴海岸」である。

若かりし時、ここで泳いで、岩で顔を怪我したことを思い出した。



女岩と義経岩

この岩は「義経岩」といい、文治3年(1187年)に源義経が奥州下りの際、ここを通りかかった時、にわか雨にあい、この岩の下で家来ともども、雨宿りをしたという伝説に由来---

また、近在する女岩、男岩と共に、この海岸は秀景をなし、かつて越中国司として伏木に在住した青年歌人、大伴家持もこの絶景を多くの万葉集に収めている、と案内板に記してある。



氷見線、義経岩、女岩、立山連峰（国道 415 号線から）

晴れた日、道の駅「雨晴」から、富山湾と立山連峰を望む大パノラマは、必見である。

しかし、3回入館したが、2回満席であり、土日は、ゆっくり休憩することは出来ないようだ。

ここには、サイクリングに必要な空気入れ、修理工具などが完備している。



道の駅「雨晴」全景。

太田中村東部川の橋

高岡市の氷見市寄りには、下図のような小川が数多く存する。
いずれも二上山からの灌漑用の「ため池」から流れていると思われる。
橋の欄干には名前が付いていない。



JR 雨晴駅



JR 島尾駅



雨晴駅の東側の小川



「雨晴マリーナ」横の小川



上図(2枚)は、高岡市太田地区の農業用水

いづみかわ まつたえはし
泉川の「松田江橋」

泉川は、二上山(274m)を水源とし、島尾地区を貫流して富山湾に注ぐ二級河川である。

国道 415 号線とほぼ並行している「漁火ロード」は、歩道幅が広く、防風林に囲まれた快適なサイクリング道である。



左図

「漁火ロード」は、ほぼ直線の道である。

松田江橋は、平成 7 年 6 月竣工の河口橋。

歩道と共に綺麗な橋である。



「松田江橋」から富山湾を望む



右図

「漁火ロード」は、「イカ」をイメージした塔のプロムナードが建っている。



左図
「松田江橋」の欄干



島尾海岸の海水浴場の案内板



キャンプ場の中に架っている橋

「氷見市海浜植物園」

この植物園は、1996年(平成8年)に建設された。

円形型の建物で、その内側にターザンロープ、砂場など子供たちの遊びの芝生となっている。

4階に喫茶店があり、富山湾と立山連峰を眺めながらの昼食は、最高だった。

家族連れのコーヒータイムとしてもお薦め場所である。



「氷見市海浜植物園」の全館

氷見駅

高岡営業所に勤務していた時(昭和 37 年)の仕事のエリアは、氷見市も含まれていたため、高岡市と氷見市の境である海老坂(160 号線)を越えて氷見市の山の中を 125cc のバイクで走り回っていた。

冬の凍結時、その海老坂で滑り、痛い思いをした。

一方、飲み会となれば、わざわざ氷見市へ出かける事もあり、帰宅する時は、氷見線を利用した。

久しぶりに、氷見駅に寄ってみると、HIMICA(ヒミカ)が駐車していた。



氷見駅のプラットフォームから見る終着駅

下図は、「ヒミカ」(HIMICA)と称し、4 人乗りの電気自動車である。

氷見駅前の駐車場にあり、普通免許証で予約して乗ることが出来る。

車体は、ご覧の通り、氷見の海と立山連峰と思わせる色に、特産のブリが描かれ、明るく、遊園地の車という感じ。

氷見駅構内にある観光案内所へ申し込めば、利用できる。

料金は、3 時間で 2,000 円。



「ヒミカ」(HIMICA)

ふつしょうじかわ まつた えしんばし
仏生寺川の「松田江新橋」

仏生寺川は、二上山を水源とし、氷見市内の農業用水の役を果たして、富山湾に流れる、二級河川である。

配電線の設計の仕事で、十二町瀉方面へ出かけていたが、山手には、小さな「ため池」が数多く見られたのが印象に残っている。

今は、絶滅危惧種のイタセンパラの生息地として、また、オニバス発生地として有名になっている。



「漁火ロード」に架る「まつたえしんばし」、 「松田江新橋」



「仏生寺川」



「平成6年12月竣工」



「松田江橋」の上流に架る「野尻屋橋」を望む。

なとりしゃ
氷見の「須々能神社」・「魚取社」

下図は、氷見市地蔵町の「須々能神社」であるが、その左側面には「魚取社」と記してある。

氷見の海岸一帯に「魚取社」という神社が点在している。

富山県東部の生地、魚津など海岸線に沢山の神社を観てきたが、「金比羅社」が



「須々能神社」

多く、「魚取社」という神社は見当たらなかった。

名前の通り、漁師の安全と大漁祈願の神として祀られて来たのであろう。

「須々能神社」の「須々」は、能登半島先端の「珠洲」から発した言葉であろう。

潮と魚の流れから、氷見市に伝えられたものと想像している。

下図は、2022年5月24日、宿泊した「信貴館」(氷見市本町)である。夕食の献立は、勿論、魚料理だが、刺身の種類とボリュームの多さにびっくり。翌日、帰宅してから、当分、刺身は要らないと-----。



「信貴館」から拝んだ朝日
久しぶりに、自然の崇高さを味わった。



「信貴館」正面

さかえはし
湊川の「栄橋」

湊川は、十二町瀉から上流を万尾川(もおかわ)と呼ばれているので、湊川の長さは、十二町瀉から氷見漁港までの約 1km となる。

仏生寺川と同様、二上山を水源とした二級河川である。



「湊川」



欄干のデザインは漁網かも---「さかえはし」

「栄橋」周辺は、氷見市民の憩いの場所として、整備された区域のようである。また、観光客向けの「ドラえもん」の彫刻などが点在している。



左右の図は、
「栄橋」の上流に架る
「和平橋」。
斬新な造り。



なとり えびす
右図: 「魚取神社」、「恵比須(寿)神社」など、漁業関係者が豊漁と海の安全を祈願する社であるが、「魚取」を氷見では「なとり」と呼ぶが、射水市では「うおとり」と呼ばれていた。



魚取神社（「栄橋」の左岸）

氷見市内を走っていると、突然、一軒の家屋側面に、藤子不二雄^④さんのプロフィールなどが描かれた交差点に出くわした。



本町交差点にある「ポケットパークモニュメント」

案内板には、

ぼくが生まれたのは、氷見漁港の近くにある光源寺です。

小さい時から海が好きで、特に、沖合に浮かぶ辛島と三千 m 級の山並みが聳える立山連峰は最高の眺望です。

下図のモニュメントは、氷見の鰯に乗って跳ねるハットリくんたちに、氷見の元気を重ねて表現したものです。



鰯に乗って跳ねるハットリくん

このほか「カラクリ時計」や「ブリに乗ったハットリくんたち」、そして潮風通りには、富山湾の漁をモチーフした「サカナ紳士録」など、僕のキャラクターがたくさんあります、と記してある。



「まんがロード」にあるキャラクター。

氷見漁港

氷見漁港と言えば、「定置網」の総本家である。

今回、「富山湾岸サイクリングコース」を踏破して、東側の入善漁港と西側の氷見漁港とは、全く趣を異にしている。

その一つが、防波堤の高さである。

入善漁港の周辺の堤防は、高い所で約 10m も有ろうかと思うのに対して、氷見漁港のそれは、無いに等しい。

その理由は、沖合の深さに起因する。

東部は、海岸線から約 2 km 離れると、5～600m と深くなるのに対して、西部は、陸棚が 2～3km と続き、2 km 離れても約 100m であり、それが波の高さ、となっている。これが定置網魚法を発達させた所以、とも聞く。



氷見漁港

氷見漁港の周辺は、「漁港公園」として整備されており、下記の碑が置かれている。



「ブリ小僧」



歌謡曲「氷見港」の歌詞(石碑)
中島誠二 作詞

氷見漁港場外市場「ひみ番屋街」

「ひみ番屋街」は、立山連峰一望できる「道の駅」であり、富山湾の魚や土産物がそろっている。

隣に、氷見温泉郷「総湯」があり、入浴してみたところ、泉質は塩化物強塩泉であり、私みたいな長湯者には、少し塩素の匂いが気になった。

5/24(火)の平日であったが、近郊客で賑わっていた。



「ひみ番屋街」の正面

かみしょうかわ ひみのえ
上庄川の「比美乃江大橋」

「比美乃江橋」は、上庄川の河口に架り、「ひみ番屋街」の横と一体的に整備されている。



「比美乃江橋」

平成12年に完成、橋の長さ112m、幅21m、斜めに立つ主塔の高さ51mの斜張橋である。地引網を引き上げるイメージのデザインであろう。



上庄川の左岸から見る斜張柱



欄干に「上庄川」



竣工年月
(平成12年3月)

右図は、番屋街の海側一带に広がる「比美乃江公園」の案内図である。



案内図



「比美乃江公園」の中にある展望台などの施設

よかわがわ しんましまはし
余川川の「新聞島橋」

余川川は、石川県境の碁石ヶ峰(461m)から流れている二級河川である。河口地点ではゆったりとした流れである。

「新聞島橋」は、氷見市の都市計画によって新設された道路「藪田下田子線」に架橋され、欄干の竣工年月では、昭和40年3月。



「新聞島橋」



「しんしまはし」



「余川川」



「新聞島橋」



「新聞島橋」から「阿尾城跡」を望む
珠洲市の見附島(俗称 軍艦島)を
反対向きにしたような形

下図は、氷見市の余川川～阿尾川間の田畑を潤して、有磯海へ流れ出る豊水口
であり、このような出口は、あちこちに点在している。



小川の放水口

高波で塞がれる心配はないようだ



左図のプレートは、氷見海岸の護岸に貼られた「ビューポイント」で、カメラ
撮影場所として紹介されている。

富山市から射水市、高岡市、氷見市の海岸線には、堤防が無いと言っても過言ではない。(富山県東部に対して)

堤防を高くする必要が無いのは、富山湾に入って来た「寄り回り波」が陸棚で消波されるからであろう。



間島からの「阿尾城跡」

「阿尾城址」(富山県指定史跡)

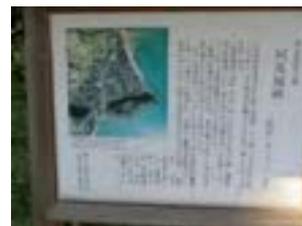
「阿尾城址」は、富山湾に面した標高 20~40m の独立丘陵上に残っている。



「白峰社」入り口の鳥居

築城時期は、15世紀後半頃、菊池右衛門入道・十六郎の父子が居城し、佐々成政に従ったが、成政と前田利家に対立すると、前田家へ寝返り、一万石を安堵(公認)された。

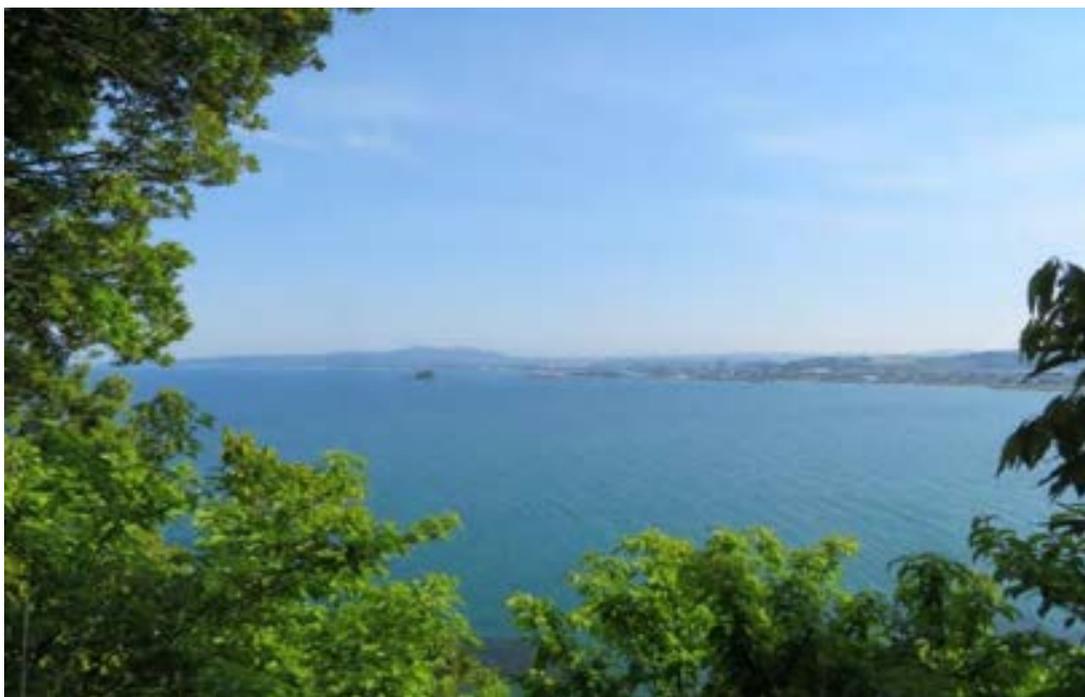
(下図の氷見市教育委員会の説明看板から)



頂上までは、かなりの急勾配であり、若い気持ちで登ったものの、帰りは、足がガクガクになり、途中、階段で座り込んでしまった。

頂上からは、富山湾が一望できる、素晴らしい眺望を期待して登ったが、残念ながら、「憩いの広場」伝本丸跡へは「危険標識」が立っていて、入ることが出来なかった。

結局、下図のように、樹木の間から、氷見市、唐島、二上山が遠望できるだけとなった。



阿尾城址の本丸跡地からの眺望

高齢者は、ここまで登ることは出来ない。

せっかくの景勝地なので、立山連峰、富山湾、市街地の大きなパノラマ的な場所として、デパートに有るエスカレーターのような設備があればと思ったが、設置スペースやコストパフォーマンスを考えると容易ではない。

苦勞して歩いてくることに意義があるかも知れないが---



「白峰社」(左) と「白峰社本殿跡地」(右)

大伴家持が6月上旬、阿尾の浦に打ち寄せる白波と吹き付ける強い東寄りの風を詠んだ歌、と記してある(下図)。



万葉集卷18・4093の詩の石碑

英遠(あお)の浦に
寄せる白波
いや増(ま)しに
立ち重(し)き寄せ来(く)
あゆを疾(いた)みかも
大伴家持

[通釈]

英遠(あお)の浦に寄せる白波 しきりに波立ちつぎつぎと うち寄せて来る
東の風が激しく吹いているのだな

右図

阿尾城址の道路を挟んだ向かいにある浄土真宗大谷派「願生寺」



あ お 阿尾川の「阿尾橋」

阿尾川は、宝達丘陵を水源とし、氷見市を流れる二級河川で、農業用水としての役割が大きいようだ。

また、氷見市内の河川の水源は、石川県との県境の山並みであり、その標高は500m前後なので、河川長も10km程度と短い。

そのため、各河川の上流には、ため池が点在しており、また「棚田」もこの地域の特徴である。



左図
160号線に架る「阿尾橋」



欄干に記してある「阿尾川」(左)と「あおはし」(右)

氷見海岸には、「氷見漁港」、「阿尾漁港」、「藪田漁港」、「宇波漁港」、「大境漁港」と漁港がっらなっている。



「阿尾橋」から富山湾を望む



藪田の松波さん宅でご馳走になった自家製の苺
喉が乾いていた時、コーヒー共に美味しく頂きました。
ご馳走様でした。(2022.5.24)

たるひめがわ しんたるひめはし
垂姫川の「新垂姫橋」

垂姫川という名前は、なんとなくロマンチックであり、尋ねてみると、やはり「山の神」、「海の神」の恋愛伝説があって、ハッピーエンドだったという。上流に「垂姫神社」があり、いまさら恋だ、愛だという年でもないと思い、素通りしたが、今、パソコンに向かっていると寄れば良かった、と反省――。

万葉集の巻 18-4048 に大伴家持が残している。

「垂姫(たるひめ)の 浦を漕ぐ舟 梶間(かぢま)にも 奈良の我家(わぎへ)
を忘れて思へや」

(通釈)

垂姫の浦を漕ぐ舟の櫂(かい)を取るほどの、わずかな間でさえも、奈良のわが家を忘れてしまったりするものか 片時も忘れられないものだ



「垂姫橋」から下流(富山湾)を見る(左図)



「垂姫橋」から上流を見る(右図)



「垂姫橋」の欄干



昭和 11 年 5 月 竣工

竣工：昭和 11 年の橋が、今も現役で利用されているのは、私が走った河口橋の中で 2 番目に古い橋である。90 年近くも海岸線の風雪に耐えてきた橋に乾杯だ。



藪田の「三柱社」、 「新垂姫橋」

新設された国道 160 号線に「新垂姫橋」が架かっている。左図の小屋風の建物は、「三柱社」である。

立て看板によると、平成 18 年、氷見の漁業伝説において、歴史的文化的価値が高いことから、農林水産大臣より「未来に残したい漁業農村の歴史文化財産百選」に選定された。

御祭神は、恵比寿様、大黒様、金比羅様を祭ってあることから「三柱社」と称されている、と記してある。

九転十起の像

国道 160 号線を右に富山湾、左に新緑の山並みを気持ちよく走っていると、ひと際目立つ看板が建っている(下図)。

ここは「七転八起」では足りない、京浜工業地帯の父、浅野セメント創設者、浅野総一郎氏の生誕地である。



「九転十起の像」



「浅野総一郎」の翁像

銅像を囲む壁側には、浅野総一郎氏が取り組んできた新しい事業の史実が細かく書かれている。

多少、時間を要するが、読んでみた。

そのバイタリティーと意欲には感歎し、またその業績には、少なからず興奮させられた。



詳細に書かれた「事績」

2017年7月10日(月)～14日(金)、北海道のオホーツク海岸線を走った時を思い出した。



オホーツク海の冬季の季節風が強いので、バス停の造りが非常にしっかりとした建物であった事を――。

左図

「 Kushiro Bus Stop」

氷見海岸は、オホーツク海岸ほどの季節風は考えられないのに、写真のような風雨よけの建物になっているのは、お客さんに対する優しいバス会社の心遣い、であろう。



Kushiro Fishing Port



Kushiro Fishing Port from the opposite side

下図は、 Kushiro Tunnel を通らないで、海岸線を迂回した時、昔の漁師町を彷彿とさせる雰囲気が残っていたので、パチリ――。





小杉漁港



小奇麗な食事処



岩井戸温泉郷 (左・右)

バス停「宇波」(下左図)の横に、ここから新潟県境の朝日まで「富山湾岸サイクリングコース」で95kmとの標識(下右図)がある。



バス停「宇波」



「富山湾岸サイクリングコース」標識

う なみかわ わきかたはし
宇波川の「脇方橋」

宇波川は、宝達丘陵を源とする二級河川であり、宇波漁港の横から富山湾に注いでいる。

国道 160 号線に架る「脇方橋」は、歩車道個々に整備されており、新しい橋梁のように見えた。

欄干には、橋の名前、川の名前などは無く、橋脚のプレートには、北陸地方整備局が 2011 年 9 月完成とある。



「脇方橋」歩道



「脇方橋」の上流



宇波漁港の道路標識



宇波漁港

丁度、宇波漁港に帰船するのを見たので、岸壁への着岸の仕方について、見学させてもらった。

乗っていた 2 人の漁師は、プロとは言うものの、いとも簡単に 1 回バックエンジンをふかして、ピタリと着岸させる技を見せてもらい、心の中で拍手していた。

ついでに、今日の釣果を訪ねると、真鯛 20 匹ほど見せてもらい「油代にしかならんちゃ」とのぼやきであった。



160号線を横断する小川の「排水口」



「灘浦トンネル」



160号線沿いにある「朝日神社」(左) と「大栄寺」(右)

小境海岸 CCZ

(Costal (海岸)、Comunity (コミュニティ)、Zone (ゾーン) の略)

CCZとは、「コースタル・コミュニティーゾーン」の略で、国土交通省の肝入りで、全国的に展開された砂浜保全事業である。

1950年頃(小学6年生頃)の林間学校を思い出す。

それは、氷見漁港から「灘浦丸」に乗って亜熱帯植物で有名な「虻が島」へ行き、島の中で泳いだり、サザエを採ったりして、対岸の中田「はしもと旅館」に宿泊した夏休みである。

その時の観光は、「大境の洞窟」だけであり、小境海岸は、「灘浦小学校」の前の小さな海辺でしかなかった。

その海浜が、現在、下図のような人工の素晴らしい海水浴場に変身していた。

写真では分かりにくいですが、湾曲したビーチは、アメリカのフロリダ半島のマイアミビーチ-----20年前-----のミニチュア版という感じであった。



小境海岸の CCZ

下図は、海岸施設の案内図である。

その説明によると、

良好な自然環境を積極的に保全、回復する必要の高い海岸において、高潮、津波、侵食等の自然災害から海岸を防護することと併せ、住民団体等の参画による生態系や自然景観等、周辺の自然環境に配慮した海岸保全施設の整備を行う。

地域の人々が気軽に海と親しみ、集い憩う、海洋性レクリエーションに関する様々な機能を備えた海浜空間を創出するため、海岸、公園、道路等の公共事業の整備と民間活力を積極的に導入した施設整備を一体的かつ計画的に実施する、と記してある。役所くさい文章ですね。



「案内図」

また、海岸沿いの公園には、下図の椅子など、楽しい遊戯が整備されており、家族連れでの夏休みが楽しみ、というところ----



丸椅子の上 (拡大図)



公園

「大境洞窟住居跡」 ---国指定史跡

60年振りに訪ねた。

洞窟の外景は、昔と同じであったが、洞窟内には、縄文時代から近代までの変遷について、分かりやすい説明パネルが完備していた。

説明看板によると、

大正7年(1918年)6月、白山神社改築の際に、人骨、土器、石器などが出て来て注目を浴びた。

そして、この洞窟が貴重とされる理由は、



洞窟内の白山社本殿

- ・日本で最初に発掘、調査された遺跡である事
 - ・落盤によって、できた遺物を含む六つの地層が時代別に区分されている事
- と書かれている。

洞窟内は、パネルに沿って見学できるよう案内されている。

右図の説明パネルが 10 枚ほどあり、縄文時代から脈々と人が住み続けた洞窟内の生活模様が紹介されている。

弥生時代にタイムスリップしたような感覚になる。

この洞窟は、奥行き 35m、入り口の幅 18m、高さ 8m。

灘浦海岸に面し、波浪の侵食により形成された自然洞窟である、と記してある。

なお、60 年前と様変わりしていたのは、周辺の民宿の多さであり、しかも大がかりな施設であった。



説明機の一例



白山社



「富山県の栽培漁業センター」

先日、新聞に出ていたブリの養殖でないかと思い、訪ねたが「立入禁止」の看板があり、残念---

大境洞窟から女良へ行く途中に 2 本の小川がある。

近くの山筋から流れた水が富山湾へ注ぐ寸前であるが、この地域(集落)の家屋は、蛇行している小川を正面にして家屋が建っている。

その姿は、いかにも川があつての生活、という姿勢であり、自然の恵みに寄り添う、ほのぼのとした気持ちにさせられた。

日頃、都市計画により整備された市街地のなかで生活していると、このようなランダムな姿(家屋)に、それこそ異次元を感ずるのは、如何に我々の生活が規格化されている、かと思わないでもない。



名も無い小川であるが、その河口には水門があり、海水の逆流を防止しているのかも(左図)-----。十数件の集落だが、郵便局員は、蛇行した小川の土手に沿って配達していた。



集落に流れている小川



「姿地区」は、急傾斜による危険地域のようなのである。

「はしもと旅館」

「はしもと旅館」は、小学5～6年生の林間学校として、毎年、数日、宿泊していた。



「はしもと旅館」

その時(1950年)は、今のような160号線の陸路は無かった。

その当時の「虻が島」には、「氷水・金時」も売っており、沢山の家族連れで賑わっていた。

亜熱帯植物の観測などは、そっちのけで、潜ってはウニを採り、そのまま食べていた。

6年生になると「はしもと旅館」の中田浜から「虻が島」まで遠泳することになっており、自分は、しばらく泳いでから、これ以上ダメという事で、伴走の伝馬船に引き上げられた。その場所は、大境の洞窟の沖合であったので、大きく氷見方向に流されていたことになる。

突然、「はしもと旅館」を訪ねた。

30代の若いご夫婦の応対を頂き、女将さんの話では「お爺ちゃんから、昔、富山大学の生徒が泊まっていた」と聞いていました、とあり、お互いに初対面であったが、親交を温める雰囲気になり、帰りに、氷見特産のお茶(ペットボトル)を頂いた。

しもだかわ なかたはし
下田川の「中田橋」

「はしもと旅館」の七尾市寄りに下田川が流れている。

水源は、石川県の石動山の麓で、川の延長が、約 2,500m。今回の旅では最も短い 2 級河川であろう。

欄干には、河川や橋名のプレートは無かったので、竣工年月も不明である。



「中田橋」から虻が島を望む。
(右図)



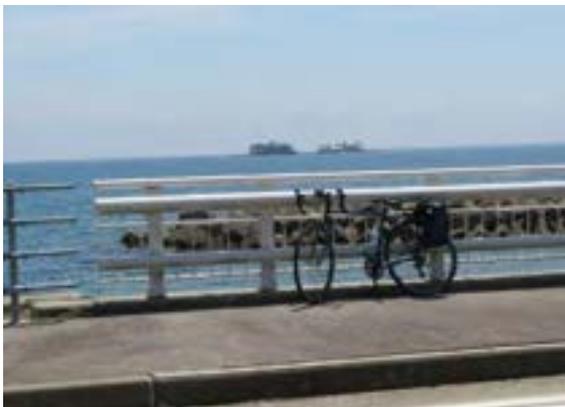
「中田橋」の上流



バス停「中田」

バス停の横に「とやまビューポイント」がある。

「虻が島」と「世界で最も美しい湾 富山湾」を紹介している。
私の好きな景勝地の一つでもある。「富山湾八景」としたい。



「虻が島」(国道 160 号線より)



遠望氷見市灘浦海岸

小川 (5 本)

下田川～石川県境の間に 5 本の小川があるが、標識が無く、住宅地図にも記載がなかったため、河川名、橋の名前などは不明である(下図)。



川幅が広いので、降雨時には洪水のようになるのであろう。





女良漁港



女良漁港の燈台と虻が島

下図は、ここから新潟県境の朝日町まで「富山湾岸サイクリングコース」で100km、との標識がある。



右図は、「汐風」というドライブインで、コークを飲んだ。

近所の高齢者3名が楽しく歓談されており、飼い猫も私の横テーブルの上で寝ころんでいた。



すくなひこなじんじゃ
石川県に入る直前に「須久那彦名神社」がある。

下右図の石碑を読んで、ここからのでの帰路の交通安全を祈願した。



すくなひこなじんじゃ
「須久那彦名神社」と石柱



「急がずに拝んで通る宮の前」の石柱



左図は

すくなひこなじんじゃ
「須久那彦名神社」社殿

県境の標識

県境の標識は、一般に道路標識のような看板で「〇〇県」と大きく表示されているが、国道160号線の場合は、小型(縦30cm位)の石碑(下左図)が2個設置されていた。

以前は、海岸線の前にある小さな「仏島」を県境と認識していた。



石碑の県境標識



一般の道路標

左に「石川県」、右に「富山県」と記してある。
石碑のサイズは、同じだが、字体がそれぞれであるところが面白い。



「仏島」



「富山湾岸サイクリングコース」の標識

おわりに

橋

には、道路橋、水路橋、歩道橋、跨線橋、鉄道橋などがある。土木工学編「土木工学ハンドブック」によると、「橋梁とは、——道路、鉄道、水路などの輸送路において、輸送の障害となる河川、溪谷、鉄道、水路などの上方に、これらを横断するために建設される構造物の総称である。」とある。

簡単に言えば、人馬が安全に、効率良く往来できるように造られた道である。

今回、橋らしきものを見つけ次第、川幅の大小に関係なく、バカチョンカメラを首に掛け、欄干と周辺の風景を撮って来た。

しかし、時間の経過と共に、その記憶が薄らいでいき、取り急ぎ、「覚え帳」として書き出した結果が、このような「サイクリング紀行アルバム」となった。

準河川・農業用水にあっては、河川名と橋名が欄干に記載されていない場合がほとんどなので、富山市立図書館の住宅地図とそれぞれの市役所河川課へ行って聞かせてもらい、また人影があれば、歓談したりして、河川にまつわる今昔物語などを聞かせてもらった。

ところが、自宅から日帰りで往復できる距離に限度があるので、2021年秋には朝日町から入善町方面、2022年春には高岡市伏木から氷見市方面への走行時には、それぞれ現地で1泊した。

運動と言え、散歩とゴルフだけの身体なので、一日通しのランディングは、まさに疲労困憊である。

旅館に到着すると、先ず、入浴だが、脱衣場に入って見る湯気は、疲れを吹き飛ばしてくれる嬉しい一瞬であり、そして、浴槽に浸って、湯上りの生ビールを

イメージするときが、最高の気分である。

旅館と言っても、家庭的な旅籠であり、奥の方で若いご夫婦が私の夕食のために、一生懸命に準備されている姿を垣間見て、自分一人だけがビールを飲んで悦に入っていることに、少なからず、後ろめたさを感じた。

下記は、小学校で習ったような話であるが、走り終えて再認識した事がある。

1. 富山湾に注ぐ水の透明度について

東部方面の黒部川、片貝川などの一級河川のみならず、農業用水も含めて、河口橋の欄干からは、河床の小石がよく見え、水流も強く、飲みたくなるような透明度であった。

一方、庄川、小矢部川の西部方面は、河床は見え、風向きによっては、河口から上流へ逆流しているような、大海原という感じであった。

これは、偏に、河床の勾配によるものである。

急勾配で有名な常願寺川の河口近くでも、1:30 (30m 流れて 1m 下がる) に対して、庄川の下流は、数百 m 流れて 1m 下がる程度である。

2. 堤防の高さについて

富山市水橋から入善町まで、テトラポットの列が途切れる事はなく、それが二重になっている海岸線も多く、また堤防の高さは、高い所で約 10m 近くもあった。

一方、富山市神通川から氷見市までは、国道 160 号線の側壁のように、1~2m の堤防であり、ランディング中も立山連峰の眺望が楽しめた。

この違いは、冬季の季節風と「寄り回り波」に対して、富山湾の海底の地形が作用しているためである。

氷見の海岸線から沖合は、陸棚であるのに対して、東部方面は、立山連峰から若干の扇状地(平地)を持ち、そのままの勾配で、沖合 300m で 5~600m の深さに達している。

氷見の定置網による寒ブリ魚は、この海底の地形の恩恵であろう。

3. 歴史と文化遺産について

奈良時代、高岡市伏木に越中の国府が置かれ、その時、大伴家持の本業は、「検知」と「年貢の取立て」の筈である。

従って、たびたび氾濫し、田畑の無い黒部川から先へ仕事で出張する必要は無く、江戸時代、松尾芭蕉の句碑と関所などの文化遺跡が散見出来た。

一方、新湊市から氷見市の海岸線には、大境の洞窟から奈良時代の歌碑が海岸線や橋の欄干に紹介されており、神社仏閣を含めて、歴史的な味わいが多く残っていた。富山市のような戦災に遭っていない恩恵でもある。

これまでのサイクリング紀行文は、下記のとおりであり、今回は7冊目となる。

今回は、写真アルバム的なスタイルとなったため、256頁にも及んだ。換言すれば、85歳まで元気で走れたという記録である。

記

1. 喜寿の冒険 東京～富山-----2011年11月10日～
(2013年5月19日、母 逝去)
2. 能登半島(奥能登)周遊-----2015年10月4日～
3. 三方五湖～琵琶湖周遊-----2016年10月18日～
4. 北海道(北部)のみち-----2017年7月10～
5. 奈良・お寺巡り-----2017年10月24日～
6. 佐渡島～戸隠-----2018年10月22日～
7. 河口橋-----2020年6月23日～

最後に、サイクリングに出かける時、節子は、決まり文句の「気を付けて-----」と言って送り出していたが、五体満足で元気で帰宅した時、心から心配していた後の安堵感を含む笑みは、いつも心に沁みていた。

ここに感謝の意を表します。

令和5年8月20日

完

A handwritten signature in black ink, reading "M. Nakamura". The signature is written in a cursive, flowing style with a large loop at the end.

[スナップ写真]

ヒスイテラスの左隣に「結(ゆい)」という食堂があり、昼食は、ご当地の「タラ汁定食」を――。

なお、「タラ汁」の歴史は、戦後と聞いたが、意外と新しい。
コロナ対策のため、マスク付きランディング。



「結」食堂の前



「浜マルシェ」正面



「番屋カフェ」の入口



テレビに出てきそうな珍百景

中村 正孝

930-0055 富山市 梅沢町 2丁目 8番 17号

電話 076-424-5137 (090-6277-5024)